

329  
145

5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



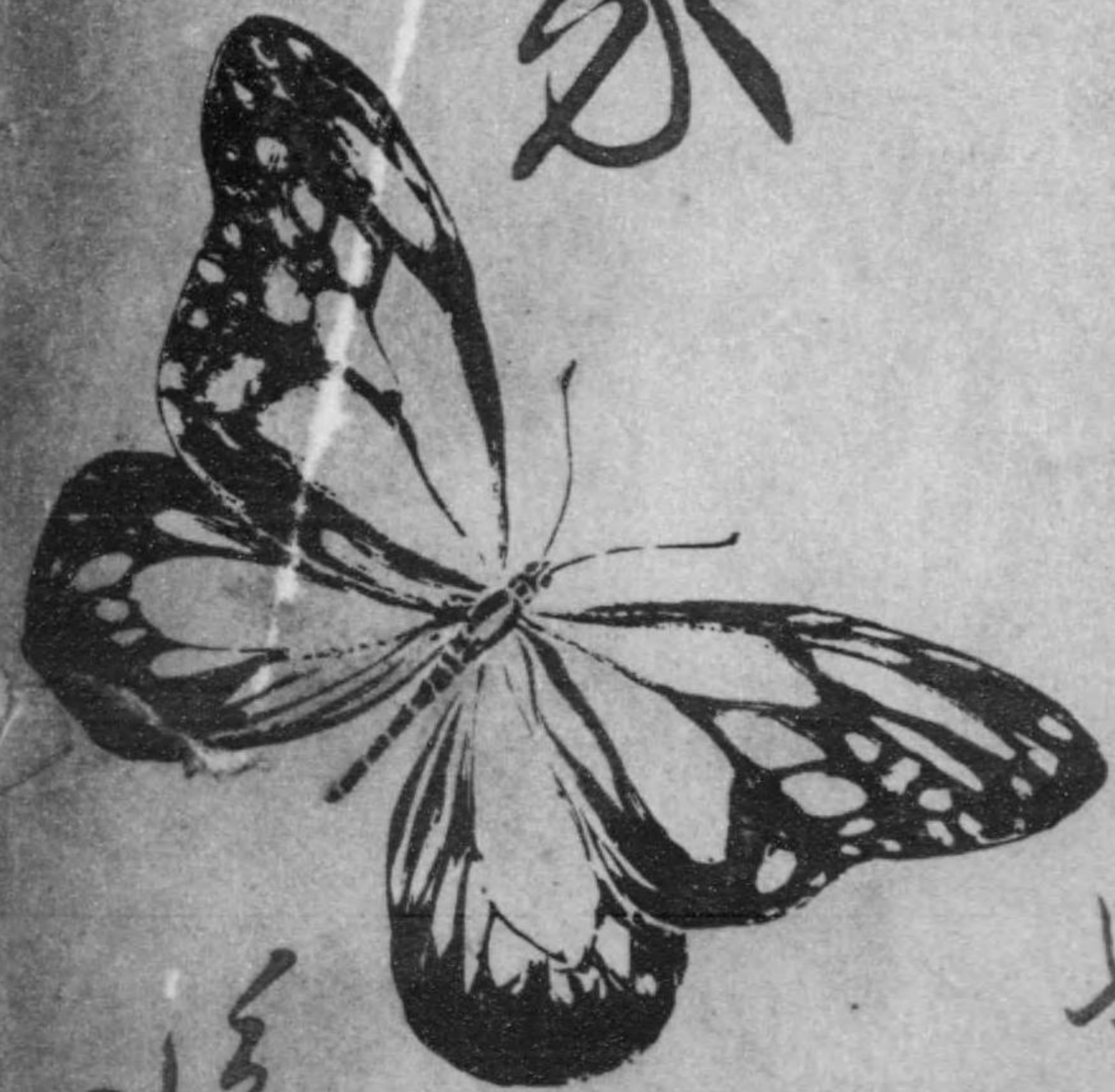


529  
145



小説

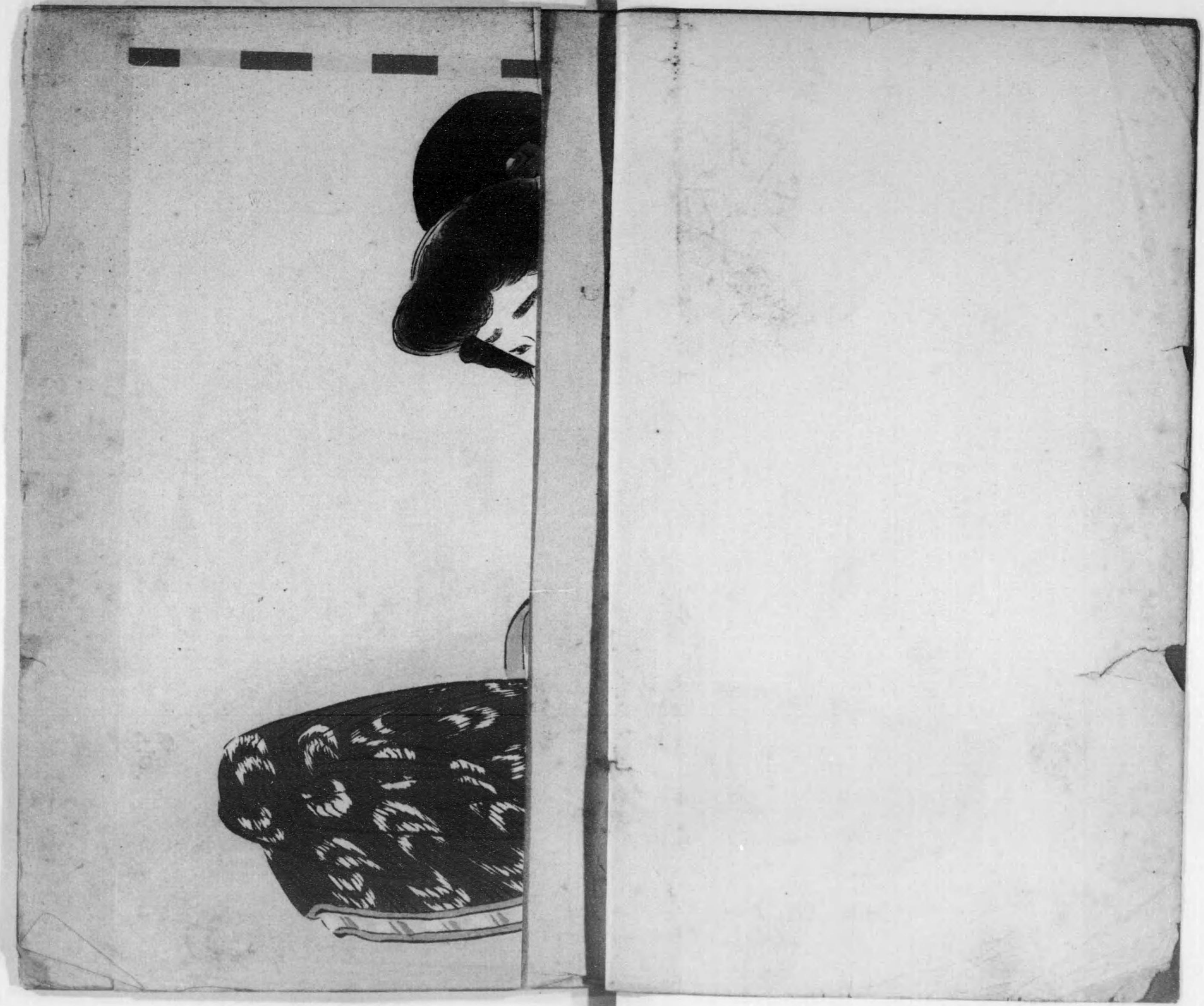
一家



女の書

後編









Handwritten text in the bottom right corner, possibly a signature or date, written in a cursive style.



329-1

→(家)←

説小家

(後編)

稻岡奴之助

大正 1.9.5 内交

(一) 假 裝 會

おそろしい猜疑の眼で水菓子の籠と房子を見較べたり、疑感深  
 ひ嫌味を云つたりした清造が、遮に優しく打解けて恚罵言を云  
 出したので、房子は更に胸が躍つた、つい此の間も房子は所天  
 に欺かれて、父から五百圓の小切手を貰つて来て、無意味に其  
 れを清造に奪はれてしまった、しかし房子は所天が其金は高利貸  
 の急場を凌ぐために使つたものか信じてゐたので、今度も又爾  
 ういふ事で、實家へ二度の使ひを命づけられるのではあるまい



かと思ふ不安の心が、自づと眼光に顯れた。  
清造は其れを目覺く認めた。

「何だか變な顔するぢやないか、否かね、はゝゝ」

と房子は敢て逆らはなかつた、

「否でなけりや聞いて呉れるんだね、難有い、はゝはゝ、何ね

其様なに六ヶ敷い事でも何でもないんだが、實は何なんだ、

明日社長の大森の別荘で納涼會があるんだ、招待されたもの

は先づ會社全體と云つても可い位で、中々盛んな催しだ」

と清造はビールをガブ／＼呑みながら、

「ところで、是も社長の發案で、普通の納涼會ぢや面白くない

から、何でも來會者は盡く意匠を凝らした假裝をして愉快に

一夜を遊ばうといふんで名は納涼會だが、實は假裝會だ」

「はゝゝ聞いたばかりでも面白さうですなえ」

「うむ、來賓側の社員連より、主人側の社長の方が非常に熱心

なので、内内は假裝會なんて詰らんと思つても其處は社長と

社員の情けなき、厭でも面白さうな顔して出席しなけりやな

らないんだよ、莫迦々々しいやうだが」

別に莫迦々々しい事はございませぬわ、西洋でも其様な會は

澤山あるつて申しますから」

「うむ、そりや爾うだ、けれど時が夏だから少々恐れるんだこ

の暑いのに鎧兜でもあるまひし、素袍大紋は尙更恐縮だし」

「はゝゝ」

「僕もいろ／＼考へたが、頓と妙案が浮ばないんだ、三田村は

旨い事を考へて、漁夫になつて行くと云つたよ簗笠に草鞋穿

きで網を擔げ魚籠をぶら下げて行くんだとさ、はゝゝ、これ

なら涼しくつて好さうだ」

「本統に旨いお考へねえ」



「詮方がないから、僕は一つ髪を被つて貴婦人になつて行かうと思ふんだ」

「まあ」房子は情けないと思つた。

「僕が束髪のを被つて、女の着物を着たら甚麽貴婦人が出来るか珍妙奇體不可思議な貴婦人だらうよ、この趣向でもつて一番大喝采を取る積りだが、その着物だねえ、態々衣裳屋から借りるのも何だから、房さんのを借りたいと思ふのだが、何うだらう、差支へなからうか、は、は、は、大切に着るよ、お頼みといふのは此事だ」

「ほ、ほ、ほ」と房子は思はず笑つた、

所天の假装會の談よりも、甚麽詰らないことに取越苦勞をして、所天が甚麽難題を持出すかと危ふんだ自分の心が可笑しかったのだ、

「宜ござんすとも、何れなどお持ちなさいね」

「可い、難有い、それぢや何だ、濟まないが一番上等の奴、

そうら何時か僕の褒めた彼の着物と帯、それから長襦袢もだ

ね、序に頭に挿す櫛も借りたいのだ、束髪櫛の方を」

「可いわ、何でもお持ちなさいね、ほ、ほ、ほ」

「よし、それで話しは極つた、ぢや明日僕が會社へ出ると直ぐ

小使を取りに寄越すから渡して呉れ難有い難有い、これで明

日の晩の趣向も出来たぞ、愉快々々、はッはッはッ」

清造は面白さうに高笑ひをして又ビールを重ねた、最う床の水

菓子の方は見向きもしなかつた、房子は其れが嬉しかつた。

( 二 ) 女 髪 結

房子は今髪を結了つた處である、さらぬも光澤のある房々とした髪、双の鬢に櫛目が立つて何とも云へぬほど美しい、すつと襟筋の通つた鬢の邊りから、格構の好い丸鬘が取分け温順や



かな其人に似合つてゐたけれども、房子の顔は何處ともなしに沈んで、色さへ何となく蒼味を帯びてゐた。女髪結が歸ると直ぐ、お杉は主に手傳つて其邊を取片付けながら、

『全く私し呆れて了ひましたよ、何てマア旦那様は酷い御方で、おらつしやるんでせう』と口惜しさうに眼を瞬たよいた、

『別に旦那様がお酷いんぢやない、今お新さんの云つた事が事實なら、彼の人が旦那様を勸めて其様な事おさせ申したのだらう』  
と、房子の眼にも口惜しさの露は煌めいてゐた。  
お新といふのは今去んだ女髪結で、房子が堀川家へ来てから此方、四日目に一度は必と来て房子の髪を結ふのであつたが、彼女は今日房子に、

『奥様つかぬことを伺ふやうですが、貴女先達て兩國の川開の

時召しておいで遊ばしたお衣裳、誰かにお貸しに成りましたか』と訊た、  
房子は餘り突然なお新の訊ねに驚いたが、能く考へると其衣服といふのは、此の間所天が假裝會に出るといふので貸した儘、其儘になつて所天は未だ持つて歸らぬ其れであつたので、流石に女心のハツと思つて、

『誰にも貸しやしないけれど、旦那様にお貸し申したの、其れが何うかして?』

『え、大變なのです、此様な事申しちや何ですが、此方のお妾様の彼のお龍さんて方がございますねえ、彼の方が貴女、奥様のお衣裳を我有らしく着て頭にも、奥様のお櫛をさして、私が見てるのも知らないで、旦那様と今一人、三味線の胴のやうな顔をした方と三人で威張つて歌舞伎座を見物して居りましたよ』



『まあ！、何時のこと？』

『四五日前でございました、私や貴女、奥様のお伴をして川開に参つた時、あのお衣裳は能く拜見して知つて居りますからおやと思つて呆れて了つたんですよ、ちや何でございますねえ旦那様が假装會とやらで、お召しなすつた上、貴女にお返しなさらずにお龍さんにお遣り遊ばしたんですねえ、呆れるちやございませんか本統に、奥様餘りお人が好くゐらつしやるもんですから、一同で莫迦に致すんですよ、お察し申しますわ、全く、何て憎らしい女でせう、あのお龍ッて奴はでこゝの束髪なんか結ひくさつて』

とお新は房子への世辭やら諂諛やらに恚麼ことを云つたのであつた。  
お杉は躍起となつて眼を睜り、口をもぐぐさせて、  
『旦那様も旦那様なら彼奴も彼奴ちやございませんか、奥様の

お衣裳を我有顔に着たりなんかして、其身に罰が當らないと思つてるんでせうか』  
房子は其れには答へず黙つて鏡を見てゐた、鏡に映る自分の顔の、何處ともなしに陰氣に寂しく、眞に物哀れげに見えるのに較べて、お龍の彼の華やかな明るい、浮々とした物ごしを想像して、知らずくゝ鏡を曇らした。

(三) 神様のお心

『あゝ憐れなる犠牲！』  
鏡の中の自分を見て、房子は心の裡で叫んだ、全く今の房子は犠牲である、何等の主義もなく何等の節操もない、只其日其時を快樂主義に過して行く放埒な所天清造の犠牲に成つてゐるのだ、清造が社長が催しの假装會に出ると稱して房子の晴れの衣裳を持つて出てから、彼是十日以上を過したのであるが、清造



は忘れたやうに其れを房子に返さなかつた、房子は多少氣に蒐  
らぬでもなかつたが、何事も所天に反抗せぬを主義としてゐる  
優しい彼女は、催促は固より其れを別に聞かうとも仕なかつた  
けれども天に口なく人を以て謂はしめ、房子は髪結のお新から  
始めて其着物の行衛を聞かされた、物は單に夏の晴着の一襲で  
あるが、この衣服といふ問題が總ての婦人には中々小事ではな  
い、房子は其れを聞いた時慙心をしたであらう、所天の爲め  
とならば着物は愚か、其身其儘を犠牲にするも更に惜しくは思  
はぬ房子ではあるが、所天が快樂の犠牲、他所の花を飾らんが  
ために自分を欺いたのであるかと思へば、流石の房子も腹を立  
てすには居られなかつた、口惜しの涙は堪へれば堪へるほど臉  
を溢れやうとするのであつた。

「犠牲！」

今度は思はず口先へ洩れて出た、其れを素早く耳に挟んだお杉

は、  
「え、爾うですとも威勢、威勢をお出し遊ばせ何だつて慙時  
黙つてゐらつしやる事はございませぬ、今度旦那様がお歸り  
なすつたら、何でも斯でもお新さんの云つたのを證據にして  
ウンと仰しやいませ、云はなきや御損でございませぬ、只仰し  
やつただけでは可けません、御自分で濱町へ押掛けて行つて  
直談判にお龍からお取戻しなさいませ、其時や私しがお伴致  
します、而して思ふさま彼奴の面の皮を引剝して遣ります」  
「真逆其様な事も出来ないけれど」  
と房子は鏡の蓋をして、

「しかし迂乎とお新さんの言葉ばかりを信する事も出来ないよ  
人には見違ひ思ひ違ひといふ事もあるからねえ」  
「何だつて見違ひをもんですか確乎に爾うでございませぬよ、爾  
うでなきや最う疾くに旦那様が奥様にお返しなすつてゐらつ



しやる筈です』

房子も心には爾う思つた、爾う思つても容易にはしたない言葉は口には出さなかつた、心の苦痛を凝乎と押へて、

『まあお前のやうに爾う一概には云はないものだよ、而して慥に

も話さないでお呉れな、何も妾の胸一つで疊んでさへ置けば

其れで可いんだからねえ』

『え、本統に奥様は神様のやうなお心でございます』

と、お杉はほろ／＼泣出した。

『お、暑い、暑い』

忽ち表の方から高い聲が入つて来た。

『おや何方だらう』

『箆筒町の御隠居様でゐらつしやいます』

『お母様が、此處は慥に散亂つてゐるから、奥の方が可いよ』

奥へお通し申すが可い』

と、房子は手早く眼を拭いてお杉と共に姑を迎へに出た。

清造の母のお兼は、平素の上走つた調子で、額の汗を拭き／＼

最う茶の間の方へ入つて来た。

『おやお母様おいでなさい』

『御隠居様ゐらつしやいます、貴方此處よりも奥の方がお涼し

うございますよ』

『お母様、彼方へ参りませう、彼方の方が涼しうござんすから

主従は下へも置かずお兼を駄待した、

『爾うですか、私は何處でも宜しい、直ぐお暇にするんだか

ら』

と、お兼は平素になく不機嫌な顔をして、房子の後から清造の居間へ通つた。



( 四 ) 其理由

良い方の茶を急須に入れて、それに湯を注ぐ房子の手元を見詰

めながら、お兼は忙しげに扇子使ひをして、

「最も構はないで下さい、直ぐお暇にするんですから、何ね、

何も恚にちよく来てお邪魔するんぢやいなんだけれど

矢張り此方の事が氣にかゝるもんだからねえ」

と、房子のついで呉れた茶を喫み、上目づかひに屹と房子

を瞻て、

「何ですか、昨夜も清造は歸りませんでしたかへ？」と語尾

に力を入れて聞いた。

それを訊かれるのが房子には何よりの辛ひ思ひで、私知らず脇

の下から冷たい汗の流れるのを覺えた、

「は、何分會社の方がお忙しいものですから……」

← ( 家 ) →

「ふん」

とお兼は鼻で笑つて、

「其様なことがあるもんですか、何程會社が繁忙しいからッて

眞逆夜の夜中を徹して事務を執るッて法もあるまい、那のお

龍といふ素性の知れない怪しい女を、何處かへ圍つて置くつ

て事を其れとなく聞いたが必と其方へ行つてるんだらう、本

統に困つたものさ」

と投出すやうに云つて茶碗を下に置いた。

房子は何と挨拶して可いか分らなかつた。

お兼は房子の結ひたての髪をジロく見て、

「おゝ綺麗に結へました、矢張りお新さんかい」

「は、今歸りましたとこなんです」

「爾うですか、中々美しく出来てます、お前さんのやうな美

しい奥様を持つてゐて、清造は何故彼様な怪しい女を何する

し

し

し

← ( 家 ) →



のでせう心得違ひな奴です』  
と、憎らしさうに我子を誹謗して、黒縞子の帯の間から貫入を  
出して、ふーと煙を吹きながら、

『しかしねえ房子さん』

と、俄に改まつた聲を造つた、

『私は不思議でならないのさ、清造が何故恚麼に内を外にする  
かそりや私の育て方も悪かつたでせう、餘り我儘に育てたから  
彼様な放埒者にも成つたのだらうが、那麼でも元は其様なで  
もなかつたのです、證據はチャンと高等商業學校を卒業して  
ゐます、其れがお前さんが來てから彼様なに成つたとすると  
房子さん、お前さん悪く聴いてお呉れでは困るが、何か是に  
は理由がありはしなからうか……』  
房子には其意味が分らなかつた、房子は未だ這の言葉の意味を  
噛分けるほど頭腦が拗けてゐなかつた、

←(家)→

『理由と仰しやると？』

『さあ其理由だがねえ』

とお兼は態と考へる眞似をして、

『お前さんには分りませんか』

『ほゝゝ、何でございますか』

『ふむ分らない、むゝ分らなきや私が云つて聞かせませう』

とお兼は灰吹をトン／＼と叩いて疑乎と房子を瞻入つた、其眼

には一種の凄味が籠つてゐた。

廳で午に近い日光が煌々庭を照して、庭の青葉を吹いて來る風  
はあつても、暑氣は身を焼くやうであつた。

(五) 葬式と演劇

嫁と姑、素より互ひに感情の善からう筈はない、けれども房子  
は世間普通の嫁ではなかつた、一つは姑と同棲してゐぬからで



もあらうが、房子はこの堀川家へ嫁付いて来てから、姑お兼を自分の生みの母よりも、尊んだ、三日にあげず簞笥町を訪ねてお兼の機嫌を取つてゐた、其行く度毎に何なりともお兼の嗜好な食物を持つて行つた、慥にまで姑を大事にする嫁が何處にあらうお兼は實に良い嫁を獲たのである、最初自分の眼力が明に強かつた爲でもあらうけれど、實にお兼に取つては堀出し物をしたのだ、人に倍して賢しいお兼は其れを知らぬではなかつた兄の賢二の妻にあたるほど房子を褒め立てゝゐた。

斯うして長い光陰を何時までも過して行けば、双方何の謂分もないのであつたが、清造がお龍を外へ圍つて内を外にするやうに成つてから、お兼は何となく房子を憎み初めた、我子清造の放埒を房子の罪に歸した所謂窮みをする子は憎からで、其れを捕縛して行く繩取りが怨めしい格であつた、清造が慥放埒に成つたのも、房子が清造に對する持てなし振りが悪いからで

あると信じてゐた、男は女の梃の取りやう一つで何うでも成るものであると、昔氣質に信じてゐた、慥事から此頃房子を見るお兼の眼光は全く變つてゐたのであつた。

お兼は又スバ／＼煙草を喫んで、

『清造だつて相當の學問もした者だから、何も一概にお前さんが憎くて、お龍が可愛ひからばかりで慥ことを爲るのではあるまいと私は思ふがねえ、お前さん甚麼とお思ひだい』

房子は愈々返答に窮して了つた、けれどもお兼は其返答を待つたのではない直ぐ後を續けて、

『こりやお前さんが清造の氣に逆らひなさるからだらうと、まあ私は爾う思ふのだが……』

『お母様其様なことは決してございませぬ』

房子は意外な姑の言葉に我知らず斯う云つた。

『いや／＼』とお兼は首を振つて、



『そりやお前さんは逆らにはなひだらうが、彼の子の眼から見ても逆らふやうに見えるから詮方がない』  
何たる難題であらう、房子は悲しく成つて来た、

『第一お前さんの其顔がねえ』

と、お兼は疑乎と房子を見て、

『何時だつて其様な寂しい顔をしてゐなさるだらう、そ、其處

だて、早い物の臂が、お前さんだつて爾うでせうお葬式の席

に列なつて、お経や鉦の音を聞いたりするよりや、演劇を見

たり義太夫を聴いたりする方が面白いでせう、お分りかい』

房子は始めて姑の心を知つた、姑は自分が恚内氣な稟性であ

るから、所天がその寂しさに嫌ふのであるといふのだ、詰り自

分の顔がお葬式のお経や鉦のやうに陰氣であると云はれるので

あると思つて、房子は最う身も世もあらぬやうに悲しくなつ

て来た、泣くまいと思ふても、涙は自然と眼に溢れて来た。

『それ、そのお顔ですよ、ほゝゝ』

とお兼は押出したやうに笑つて、

『根が彼の子は陽氣な事が好きですからねえ、其れをお前さん

で心得てさへおゐでだつたら、又ねえ、彼の子だつて、爾う

可い、没理漢でもないんだから、しかし房子さん悪く思つちや

可くないよ』

チク、針で刺すやうに、恚麼ことを種々并べた上、お兼は午

砲が鳴つたのに態と中飯の馳走にも成らず、止めるのを振切つ

て他人らしい挨拶をして歸つて了つた。

其跡で房子は堪らず泣かれた。

(六) 忠告

東京全市を焼盡さんとした猛烈な残暑の日光は少しく炎威をお



てッヨ、と吹込んだ、窓の外には夕焼雲が飛んでゐた。  
 堀川清造が勤める△△會社の三階の應接室で、この涼風に吹か  
 れながら、頻りに何事か話してゐるのは會計課長の堀川清造と  
 副支配人の三田村與四郎とであつた。  
 最新形の背廣を着て、高い襟を掛けた三田村與四郎は、見た處  
 卅四五の美男子で新派の俳優かとも思はれるばかりに表情に富  
 んだ顔をしてゐる男で、矢張り清造と同じ才子肌ではあるが、  
 其れでも清造よりは何處やらシツクリと沈着いた點があつた。  
 與四郎は香の高い葉巻の煙の中から熟々清造を見て、  
 『君、慥つちや可けないよ、だけれど實際此頃君の評判が面白  
 くないのだ此の間も僕が社長の宅へ行つた時、社長は君の事  
 を云つて嘆息してゐたよ、堀川は高商出の秀才でもあるし前  
 途大に見込みのある人物だが、何うも那麼風に素行が修まら  
 ないでは困る、殊に會社の會計を預けて置く人間だから彼の

一舉一動は會社の信用に多少影響する處があるから、今の中  
 に何とか改善して呉れなくつちや、と斯うだ、はゝゝゝ』  
 與四郎は如才ない笑顔を見せて、  
 『そりや何だ會社に於ける君の勤務上に一點の缺けた處のない  
 ことは、社長も認めてゐるし、僕等も能く知つてるが、恁麼  
 評判が立つと君のために面白くないからねえ』  
 『むゝ、そりや爾うだ』  
 清造は一言もなかつた、最近二三ヶ月といふもの、氷川町の家  
 へは碌々歸つたこともなく、濱町のお龍の所にばかり耽溺して  
 始終酒氣を帯びてゐるといふ自分の素行に對しては、清造自身  
 も悪いことであるとは覺つてゐた。  
 『全體君は妻君が氣に入らないのかね』  
 と與四郎は笑ひながら、  
 『僕等の眼から見ると恐らく那樣な良い妻君はなからうと思ふ



「氣に入らないッて、其様な事は無いが」  
 「爾うでなきや君、妾宅ばかりに入浸つてゐないで、些と宅へ  
 歸るが可いせ、僕等風情が君に慙んことを云ふのは甚だ失敬  
 な譯だが、何を隠さう、實は君の母公から頼まれたんだ、母  
 公は君が家へ寄付かないのを非常に心配して、若し妻君が氣  
 に入らないなら氣に入らないで、何とか其處には相談も成ら  
 うから、兎に角家を外にするだけは廢めて呉れるやうに、貴  
 方から作に爾う云つて下さいッて昨日態々僕の宅へお出でに  
 なつて泣くやうにお頼みさ、其れで僕も慙ん面白くもない事  
 を君に聞かせる譯だが、君も其處を汲取つてね、はゝゝ、野  
 暮を云ふやうだが、家へ歸る事に仕たら何うだ」  
 清造は會社中でも這の與四郎を一番意見の合ふ友として交つて  
 るた、殊に卒業の時期に前後こそあれ、同じ高商出の同窓でも

あり、普通の同僚とは見てゐなかつた、その親しい友から染々  
 斯う忠告されて見ると、強て其れを争ふほどの勇氣は出なかつ  
 た、又争ふべき理由も見出し得なかつたので、彼は羊のやうに  
 柔順に頷いた、  
 「有難う、いろく君に心配さして濟まなかつた、僕が悪い、  
 なあに、何でもないんだが、四角四面な窮屈な妻の前より  
 濱町の方が暢氣なもんだから、はゝ、はゝ今夜から吃と歸る  
 よ有難う、社長の信用を失つても何だから」  
 「爾うだとも、ちや今夜から歸るとにしてくれ、其れで僕も大  
 に安心した、何うだ、是れから二人で夕飯を食はう、失敬料  
 に僕が奢るよ、はゝはゝゝ」

(七) 急用

與四郎の忠告は極めて機會が好かつた、元來快樂主義の清造は、



常に新しい快樂のみに憧れてゐたので、最初は濱町の妾宅が何とも謂へぬ楽しさを覚えさせたのであつたが、毎日同じことをしてゐる中には、漸次にその單調に飽いて、近頃は華美に浮々としたお龍の待遇さへ何となく鼻に付き出して來た機會で、與四郎の忠告を聞くと、流石に會社に於ける自己の信用といふ點にも氣が付き、母の心配や房子の苦勞も氣の毒なやうな氣がして、其夜は久し振りで氷川町の家へ歸つた。

斯うして歸つて見ると、房子が自分に對する待遇は、人の妻としての情愛が籠つて上走りの浮々としたお龍よりも眞實な點があつて、清造は流石に憎からず思つた。

けれども、一ヶ月も二ヶ月も家を明けた自分に對して、妻の房子が只一言の怨みがましいことや、嫉妬らしい舉動を見せないのが、何だか物足らぬやうな氣がした、口姦しく騒ぎ立てられるのも困るが、嫌味の一つや二つは云つて、多少は拗た點も見

せて呉れた方が趣味があつて可からうと思つた。

房子の方は又、姑から謂はれた言葉が頭腦に浸込んで、一時はその露骨なお兼の言葉が怨めしく悲しく、自分は笑顔や愛嬌を賣物にする藝妓ではない、人の妻として一家の主婦たる身として其様な浮いた考へを持つてゐねばならないとは、何たる情けないことであらうと悔んだのであつたが、所天を慰藉するといふ點から考へて、清造のやうな所天には爾ういふ事も必用であらうかと思ひ直し、今度清造が歸つた其機會を利用して勉めて笑顔をつくり、勉めて浮々した容子をして見せた。

それが果して清造の氣に入つたのか清造は其れから十五六日の間一夜も家を明けなかつた。而して堀川の家には珍らしくも時々夫婦の笑聲が聞えた。

是れで此儘無事に續いて行つたなら、最うこの小説に書くところは無くなるのであるが、其れが何うしても爾うは行かなかつ



た丁度清造が謹慎な態度に成つてから二十日程の後、昨日今日の朝夕は何となく肌冷氣を覚える或日の夕方、社長の宅から急用といふので、使ひの者が一封の書状を持つて来た、而して其口上に、

『先刻會社の方へ電話を掛けましたが最うお退去の後だといふので態々此方へ伺つたのです、委細はお手紙に認めてあるさうですが、成るべく早くお出でを』といふのであつた。

清造は其手紙を受取つて鳥渡眉を擧めたが、社長の宅からといふのは眞赤な嘘で、濱町のお龍からの呼出し状であるといふも覺つた、しかし傍に不安な顔をしてゐる房子の手前清造は何處までも眞面目を装ふて、房子の方からは見えぬやうに少しく身を横に捻じて開封した、その文面は至極短簡に

拜啓一大事の御相談有之候に付此の書状御覽と同時に速刻御來車被下度委細は拜眉の上可申上候勿々

と健者な男手で書かれてゐた。清造はこの手紙の筆者が秋山であるといふことや、お龍が自分の遠ざかつてゐるのを憤つてゐるといふことなどを思つて、面倒だが大急ぎで社長の宅へ行かなさやならない、早く着物を出して呉れ洋服の方を』

と、什麼も事ありげに房子に命じた。

(八) 腹が減つた

濱町三丁目の角で電車を降りた清造は大股の急足で細い横丁を曲つて、間もなくお龍の家の前になつた、カラ／＼と小氣味の好い音のする格子戸を開けて何氣なくツカ／＼と内へ入つたが驚いた。

何處かへ轉宅でもするやうに、支那靴や柳行李の散亂して。箆の抽斗しは開放されてゐた、お龍が其中で忙がしきうに行李



の紐をしめてゐた、其れを無言で眺めながら、秋山種郎が奥の  
八疊に胡座を掻いて真角な盤大面に笑を湛へてゐた。

「何うしたんだ此體裁は！」

清造は呆れて突立つた儘、ジロく四邊を見た。

「おやお歸んなさいまし」

と、お龍は行李から手を放して、清造の前へ恭しく兩手を突

いた。

「全體マア何うしたんだ、僕は彼の手紙を見て急いでやつて來

たんだが、こりや何うしたといふのだ？」

「は、實は妾、今日限りお暇を戴きたいと存じまして……」

「何だ、暇くれ？」

「は、長々お世話に成りました御恩は忘れませんが、何うか今

日限りお暇を、は」

燎然斯う云つて退けたお龍は涼しい兩の眼を上げて屹と清造を

睨んだ。その眼の中には何だか物が煌めいてゐた。

「突然其様な事云つたつて」

と、清造は漸く其處に座つて、

「秋山、何うしたんだ、こりや」

「はッはッはッ、頗る珍だよ、實は吾輩にも分らんのぢや、先

刻吾輩が久々に訪問すると、此通り上を下への大騒動ぢや、

全體何うしたんだと聴いて見たが、今龍さんが云つたやうに

今日限りお暇を戴くと斯ういふのぢや、其他は更に要領を得

んが要するに君が久しく顔を見せないから多分は其れを憤つ

て此體だらうと想像して、即ち先刻急使を差立てた譯だが、

お蔭で吾輩は未だ晩飯の馳走にもならない、あゝ腹が減つた

はッはッはッ」

「笑ひ事ぢやない」

と清造は苦り切つて、



『そりや暇を呉れなら呉れで、其處は双方熟議の上で、理由に依つては何か仕ないでもないが、突然恁麼ことをして、龍さん、君少し何うかしてゐるね』

「は、何うか致して居りますの、改めて恁麼こと申さないでも妾と貴方の間に或るお約束のあることは、貴方のお心に、お訊ね遊ばしたら分るでせう、それに此の二十日間といふものは……最う何も申しません、妾は薄命な身の上です、何日までも恁うして御世話に成つて居りますのは、定めて御迷惑でせうから妾此儘身を引きます、是れから又放浪して寂しい生活

活を致します』  
お龍はセルの單衣の袖を顔に當て、口惜しさうに泣いた。  
「はッはッたッ、何うだい堀川君此通りだ、お蔭で吾輩は腹がペコ／＼ぢや何とか早く解決を着て、酒でも飯でも頼むせ」  
秋山は何處までも暢氣だ。

( 九 ) 秘密契約

柳行李を綱で括つたり、支那鞆の錠をおろしたり、今にも何處かへ出て行きさうな恁麼舉動をする其れが全くのお龍の本心からではなく、暫時遠ざかつてゐた自分に對する怨みの狂言で斯うして自分を驚かして遣らうといふお龍の策略であるといふことは莫迦でない清造は早くも觀破した、しかし恁麼演劇染た狂言までして、強て自分を呼寄せやうとするお龍の心が嬉しかつた、其れでこの嬉しい心持を何時までも持つていたために、清造は態と其れを素破抜かなかつた。而して什麼も其手に乗つて欺されてゐるやうな顔をして、優しい言葉で種々とお龍を慰めた。  
素より狂言でしたことであれば、お龍の方でも何時までも暇が貰ひたいと強情は張らなかつた。



「はッはッはッ、面白く、話しが極つたら其れで可い、兎に角吾輩は腹の虫が可哀さうでならないから、早く何か食はしてくれ多分堀川君も未だ飯前だらうから」

と、大の男の秋山種郎泣くやうな聲を出した。

「ほッ、食心坊ねえ貴方は、妾なんか半日や一日食べないだつて何ともないわ」

「まあ其様なことを云はないで、早く何か出して遣れ、可哀さうだ僕だつて今の騒動で大分空腹になつた、恚罵時にはビールより燗酒の方が善い」

と清造は取りなした。

機嫌を直してお龍は臺所へ立つたが、豫め準備がしてあつたのと見えて、時を移さず酒肴を運んで來た。

「や、機敏々々、流石は龍さんちや、斯うなくてはならない、何らだ堀川斯ういふ辛い處へ手のとやく人を、無殘にも二十

日間も打棄つて置くとは酷だぞ、はッ」

斯う云つて秋山は突然吸物碗の蓋を除つて汁を吸うた、

「ですけれど何だわ、矢張りお宅で奥様のお給仕で召食の方が美味しいんですとさ、妾のやうなガンガラ者はお氣に召さな

くなつたのよ假令甚麼秘密契約があつたにしろ、書いた證據物があるといふぢやなし、反古にすることなんか何でもない

ことよ、おほッ」

恚罵怨言が清造には心地よく聞えた、渠はニヤ／＼笑ひながら酌がれた猪口の酒をぐツと一息に干して、それを秋山にさした

「まあ何でも可い、俺には俺の考へがあるんだから、果して契約を實行するか仕ないか、見てゐるが可い、なあおい秋山」

「うむ、何だか吾輩には分らん、喧嘩は其處で勝手にするが可い、吾輩は食ふのぢや」

「同情のない奴だなア、儲は何だな、今夜は僕をさん／＼窘め



る積りで二人で攻守同盟をやつたな」  
 「ほゝ、當然だわ、其位の罰は受けても可いわ、二十日間も神妙に奥様の御機嫌をお取りなすつた報ひに、ねえ秋山さん」  
 「はゝゝゝ、何だか吾輩には分らんが、吾輩は親友たる堀川君に同情する事がある、那の妻君の事に就て」  
 言葉の底には何等かの意味が潜んでゐるやうに聞えたので、清造は怪しんだ、

「何をだ？」  
 「はッはッ、まあ可い」  
 「おほゝゝゝゝ」  
 「訝しいねえ、云はないと猶聴きたいやうだ、全體何だ？」  
 「ふゝ、聴かないが可い、なあ龍さん」  
 「ほゝゝ、全くだわ」  
 「しかし堀川、君何か、あの〇〇銀行の塚田時雄といふ奴を知

( 10 ) 顔に紅葉

つてるか」  
 清造は塚田と聞いて遽に不快を覺えた、  
 「うむ、知らないでもないが、其れが何うしたんだ？」  
 「彼奴此頃屢々君の家へ出入するといふが、君知つてるか知るまいねえ、君の會社へ出た留守中だから」  
 秋山とお龍は眼と眼を見合してニヤリと笑つた。

「おい、今歸つて去つた奴は誰だ！」  
 清造はおそろしく興奮した顔をして、今歸來つた儘の洋服も脱がずに、書齋の机の前へムツと胡座を撮いて房子を睨付けた。  
 渠は社長の急用と稱して家を出た切り折角治つてゐた持病が起つて、何處へ行つてゐたのか其れ切り今夜まで五日間、自分の家を忘れたやうに歸らなかつたのであつたが、今歸つて見ると



自分と入れ違ひに黒絹の羽織を着た紳士が、房子に送られて玄關を出て去つた、夜目ではあつたが、其れが二三度面識のある塚田時雄であつたので、

「やア是れは……」

と帽子に手を掛けた時雄の聲を聞きぬ振りして、態と脇見をしなから荒々しく玄關へ上つて、常に異らぬ優しい笑顔で迎へた房子を睨み付け、登音荒く書齋へ入つたのであつた。

房子は電燈の火に顔を背向けながら思はずほとと頬を赤めた、固より房子に微塵ほども暗い處はなかつたが、何ういふ理由か斯う聞かれると胸がドキンとして、不知不識顔に紅葉が散つたのである。

清造は妬ましげに其れを睨んだ、

「誰だい、僕が歸つた時此處を出て去つた奴は？」

貴方彼の方御存じでせう、何時かもお留守中に來らした、○

○銀行の塚田ていふ方ですわ

と、房子は漸く答へた、

「その塚田ッて奴が何の用事があつて來たんだ、俺の留守に何の用事で來たんだ！」

「何の御用だか存じませんが、何時も塚田さんのお出での時には相悪くお留守ばかりで……」

「ふむ、其れで所天の不在中に勝手に男子を引上げて話してゐたのか」

房子はこの一言を残念に思つた、清浄潔白な自分の心を疑ふやうな所天の言葉が怨めしかつた、自分は男子の節操を破つて、

連誘ふ妻を妻とも思はず、絶えず家を外の放縦な身持をしてゐながら、

遇たま自分を訪問する客があれば恚疑ひ深い言をいふのが怨めしかつた。

「おい何うしたんだ、何故返辭をしないんだ、其様なに黙つて



る處を以て見ると、何か貴様心に暗い覺えがあるな』  
四〇

『まあ！、何故其様なこと仰しやるのです』

と、房子の聲は頼ふてゐた。

『暗い處がなけりや、明かに返答すれば可いちやないか、その返答の出来ない處が、即ち暗い處のある證據だ』

『わ、妾に、暗い處があるか無いが、杉、杉やに聽いて下されば分ります』

と房子は最う悲しさが胸一杯に成つて来た

『莫迦ッ、杉やと同じ穴の貉だ、貉や狸に聞いたつて何が判るもんか果して心に暗い處がないものなら、今僕が彼奴は誰だと聞いた時、何故那麼赤い顔をしたのだ、思ひ内にあれば色外に顯るといふ古言があるせ、俺は探偵や裁判官ではないが其れ位の人の心は釋めるんだ』

と清造の聲も激して頼へてゐた。

『全體あの塚田ッて奴は、僕には別に交際のない奴だよ、貴様彼奴と宅へ来ない前から交際してゐたと、いふぢやないか、すると僕に用事があるのでなく、殊更に主人の留守を狙つて穴巢を狙ひに来るのだ』

あゝ、何たる賤しい言葉か、什麼柔順な房子も黙つてゐられなかつた。

『そりや妾のお友達に相違はありませぬ』

『それ見ろ、爾うだらう』

『ですけれど、妾が此方へ參つたので改めて貴方とも御交際したいと仰しやつて、此の間から三四度いらしたのですが、何時でも折悪く貴方がお留守なもんですから、其度妾と話しをして残念がつてお歸りなさるんです』

『何云つてやがるんだい、其様な甘ッちよろい口先に欺かれる清造ぢやないぞッ』



と、清造は頭から被せるやうに喚いた。  
房子は最う堪へ切れなくつて、其場へわつと泣きくづれた。

(一一) 離別の宣告

手巾を顔に當て、サメくぐと泣く房子を、清造は冷たい眼で見やりながら、尙も口汚く罵つて歇まない

『は、ハ、涙は弱者の最後の武器だと聞いてるが、僕は其様な武器にも恐れないね、何程泣いて見せたつて、慍つて見せたつて暗い身の明は容易に立たないんだ』

『ナ何故でございます！』  
と、房子は涙の中から聲を絞つた、

『へん、貴様俺が知らないかと思つて其様な事を云ふが、俺は何でも知つてる、天に口なく人を以て云はしむ俺の耳には疾うから何でも斯でもチャンと入つてるんだ、抑も彼の塚田と

いふ奴か、何時でも俺の不在ばかりを狙つて来る事から、其度上へ上げて貴様が面白さうに話してゐた事から、總て殘らず御承知なんだ、は、ハ、ハ、ハ』

『そりや、貴方のお留守中に塚田さんをお通し申したのは悪うございましてけれど……』

『當然よ！、亭主の不在に他の男と對座する、瓜田の履だ、何と云はれたつて詮方はあるまい、其様な我儘をして通つて行くと思つてるのは大間違ひだ、さあ辯解があるなら何でも云つて見ろ』

辯解は何程もある、人の妻を閨房深く押籠めて置く支那や朝鮮の家庭ならば知らず、東洋の文明國と云はれる日本の家庭で、人の妻たるものが他の男と對談さへ出来ぬといふ、其様な窮屈な社會的制裁はない筈である、心に一點の疚しい處のない身が辯解の言葉は何程でもあると、房子は屹と所天を見上げた、け



れども、斯ういふ所天の激した時、迂乎辯解すれば、辯解を辯  
解と聞かすに反抗と聽かれるであらう世には云はぬは云ふに優  
るといふ言葉がある、所天の心の和らいだ時を俟つか何よりで  
あらうと、斯る折にも房子は優しく思ひ直して、又其儘黙つて  
了つた。

『おい何うしたんだ、何とか云はないか、貴様も相當に教育を  
受けた女ぢやないか、眞逆僕の前だからつて喋れぬこともあ  
るまい、殊に貴様の親父は偉い御方で僕なんぞは眼中に無い  
人だ、へん、結婚前の條件は五千圓の持參金を附けるといふ  
約束で彌々結婚といふ段に成つてから暫時手許に保管するな  
んて人、人を侮辱した極だ、詰りこの堀川清造なる者を信用  
しないから其様な言葉も出るんだ、其様な信用しないもの  
なら何も娘を呉れて置く事は要らない、とつとと離別して引  
取つて了へば可んだ、糞面白くもない』

借は所天は此の間、の事を含んでゐるのであつたかと、房子は染  
々悲しく思つた。清造は恚怒にまで云つても尙ほ腹が癒ぬのか  
忌々しさうに舌鼓をして。

『何しろ何だ貴様と俺とは性情が合はない、僕も不愉快だし貴  
様も不愉快だらう、逆も夫婦として百年の苦樂を共にする事  
は出来ない、だから何だ双方の幸福のため、今日限り斷然別  
れる事にせう、僕は改めて宣告する、離別した、離別したか  
ら實家へ歸つて貰ひたい！』  
最後の言葉には非常な力が入つてゐた。

(十三) 無情 慘酷

『何です、リ離別ですッて？』  
房子は思はず顔を上げて所天を睨んだ、離別などいふ事は容易  
な問題ではない、其れを軽々しく口にする所天の心を蔑んだ。



「妾、離別しられる覚えはありませぬ」  
 「何だ、離別しられる覚えがない、何故ないんだ、所天の不在中に、所天の知己でない男子を引込んで所天の心を疑はしめ、それで覚えがないのか、覚えがなかりや無いでも可い、それは其方の考へで御勝手だ、しかし貴様が何と云つたつて、此方に離別する理由は何程もあるんだ、さあ早く歸れ、愚圖々々云はないで歸つて貰はう、此處は俺の家だ、一刻も居つて貰ふ事は出来ない、早く去つて貰はう」  
 清造は片手を伸して、泣いてゐる房子の肩をグイと突いた。  
 「何を爲さるんです」  
 房子は泣聲を額はせ、  
 「たとひ何と仰しやつても、妾爾う安々く離別しられる理由はないと考へますから、カ歸りませぬ、此處は妾の死場所と極めて參つた家ですもの、生てる中は歸りませぬ」

と齒を噛みしめて泣いた。  
 「ちえッ、剛情な奴だ、好的、何と云つたつて俺は離別する事に決心してゐるんだから、貴様が剛情を張つて出なけりや、人を以て改めて貴様の親父に談判する、爾うして意地張つてる奴を腕力で引摺り出すといふやうな野蠻な事も出来ないから、貴様が出なけりや今夜は俺の方で出てやる」  
 清造はすつと起上つた、而して身を曲げるやうにして、涙に暮るゝ房子を見下した、  
 「しかし何だぞ、この家の道具萬端は總て俺の有だから残らず持つて行くよ、臺所道具だけは特別で置いて去つてやるから居り度くば空家同然の家、何時までも居るが可い、はゝは、明日改めて道具を取りに来るから、其時彼は是云つたつて無益だぞ」  
 斯う云ひ捨てゝ其儘ツカゝと玄關の方へ行く清造を、房子は



追縄るやうにして引止めた、

「貴方、ド何處へ行らつしやるんです、此處は貴方のお家ぢやございませんか、何も、貴方がお出なさらななくても……」

「……ちや貴様が出るか？」

「貴耶、何うぞ御免遊ばしませ、何も、わ妾が悪いのでござい  
ます、屹と氣を付けますから何うぞ、貴方、お願ひです、貴

方」

房子は總てを自分の非にして、手を合さんばかりにして、  
詫びたけれども、飽までお龍に煽動せられて来た清造の心は最  
う狂ふてゐた、泣々袖に縄るこの優しい妻を振放して、

「ゑッ、何だ失敬な人を引張つて、俺は俺の自由意志を遂行す

るんだ、貴様なんかの指圖は受けない、恁麼糞面白くもない  
家に片時もゐられるか考へて見ろッ」

方に任して房子を突退けて置いて、清造は後をも見ずにサツサ

と出て了つた。

この無情な、惨酷な、殆んど常識を逸したやうな清造の邪慳な  
振舞を先刻から障子の陰で見もし聞きもした、忠義者のお杉は  
おろ／＼泣いてゐたのであつたが、清造の姿が門の外に消える  
が否や、轉げるやうに茶の間を出た、而して其場に泣伏してゐ  
る房子に縄り付いた、

「お、奥様ッ」

「おう杉や」

( 十三 )

主

従

「さあ奥様、彼方へ参りませう、若し人が参りますと何でござ  
いますから」

房子と共に少時其場に泣いてゐたお杉は總て涙を拭いて促した。  
「爾うねえ」



と、房子もやうく我に返つて立上つた、而して力なげに茶の間へ入つたが、拭けども後から後からと湧いて来る涙は白い手巾を絞るやうにしめして、面寝れた青い横顔が電燈の光に映じて什麼もあはれに見られた。

『奥様、貴女、彼様な事をお云はれ遊ばして、黙つておいでなさるッて事がございませぬ、私しなら亭主だつて何だつて、承知する事ぢやございませぬ、他の事なら兎も角もですが罪も科もない奥様に彼様な濡衣を着せたりして、本統に旦那様は何うかなすつてゐらつしやいます、鬼です鬼の心です』  
お杉は哀れなる房子に同情する餘り、先刻から幾度となく慥慥風なことを云つたが、未だ飽足らずに繰返した。

『歸れ』ッて猫の子か何かのやうに爾う軽々しく返せるものか、返せぬものか、能く考へて見たが可ござんす、奥様、貴女は何と思し召すか存じませぬが、私しなら彼様な事云はれ

て黙つちや居りませぬよ、さつさと歸つて遣ります、奥様、寧ろその事斷然歸つてお了ひ遊ばせ、慥慥なことを旦那様が成さるのも全くあのお龍て奴めが蔭から糸を引いてるんです、本統に何うして遣つたら腹が癒るでせう』

と、我が事のやうに慥つて、お杉はまん丸い眼を愈々丸めて口惜しがつた。

房子は是れ程までに自分に同情して呉れるお杉の心が嬉しく、其れで心が少しく和らいで、今まで烈しく逆上してゐた血が漸次々々に下ると共に、何となく胸の疼痛を覺えた、それを房子は片手で押へてゐた、お杉は急送むやうに、

『ね、奥様、構ふことはございませぬ斷然歸つてお了ひ遊ばせ莫迦々々しい何のために貴女この家へ来ておいでなんです、彼様な酷い事を云はれたり仕られたりするためぢやございませぬ、本統に奥様、黙つてゐらしぢや辨になりますよ』



「妾も實は今不圖其様な考へも起つたけれど、<sup>五二</sup> 恚怒目に遭ふのも其人に備つた運命といふもので、人間の小さい力で大な運命に逆らふ事は出来ないんだから、妾何も自分の不幸だと諦めて何處までも辛抱する氣だよ、お前から見たら腑甲斐ない者だと見えるだらうけれど……」

「そ、其様な事は思や致しません、旦那様のなされ方が餘りであらつしやるから、私し口惜しくつてく」

「難有うよ、お前の親切は一生忘れないよ」

「あら勿體ない、何を遊ばすんです、手なんかお合し遊ばして其様な事をして下さいますと、杉の身に罰が當ります」

とお杉は又泣出した。

今度は房子の方で其れを差覗くやうにし、

「しかしネエ杉や、妾は此後甚麽ことが起つても、一旦嫁付いて此處の家へ来た上だから出て行けと云はれやうが何と云は

れやうが、命の有らん眼りは此處の家を出ない考へだよ而して妾は妾の盡すだけをして、氣長く旦那様のお身持の直るのを俟つ了簡だよ、しかし、妾が爾う決心すれば、旦那様の方でも愈々意地になつて構ひ付けもなさるまいが、お前妾が甚麽難義な生活をするやうに成つても、辛抱して家に居てお呉れかい」

と、房子は今夜の所天が言葉や舉動で最う明日から寂しい獨り暮らしをせねばならぬと決心したらしい。

「え、え、置いて戴きます段ぢやございませぬ、假令御都合で奥様の方から出て呉れと仰しやつても、私しは柱に喰ひ付いても無理から置いて戴きます」

「ぢや居つてお呉れねえ、妾も心細いんだから……」

凝乎と見合した主従の眼からは、またハラ／＼と露が零れた。



(十四) 家の本尊

房子とお杉が涙に暮れてゐる時、カチ／＼と玄關前の敷石を踏む急しい吾妻下駄の音がして、

『今晚は……』といふ高い聲。

房子は其れを早くも姑のお兼であると知つて、屹とお杉に目配して、

『おや、お母さんですか、何うぞ』

と立ち迎へた。

お兼は何か有つたと見えて只ならぬ顔付をしながら、出された座布団を鳥渡片脇へ匆退けて、底に光のある眼で凝乎と房子を見た、

『また留守かい』

『は、鳥渡お出懸けになりました』

『鳥渡出懸けましたつて？』

とお兼の聲は鋭かつた。

『妾が何も知らないと思つて、お前さん好い加減な事をお云ひだが清造は最う二度と再び此處へ歸らない氣で出て去つたのでせう』

房子はドキンと胸が躍つて返答が出来なかつた。

『だから云はない事ぢやない、慥に成るだらうと思つて妾が常からお前さんに爾う云つてゐるんです、男といふものは女房の梶の取りやうで何うでも成るものだからつて、現に此の間も那麼程云つたぢやないかい』

『は……』

『一家の主人が自分の家を嫌つて、自分から出て了うてえのはそりや能々の事です、それがお前さんにやお分でないかい』



「實は今しがた清造は宅へ来ました、妾もいろ／＼聞きました  
が、そりや彼の云ふ處に我儘な言葉もないではないが、今夜  
のことは彼ばかりの罪ぢやありません」

とお兼は慙う云つて、ジロリと片隅を睨んで、

「杉や何してるんだい其處に、お茶は呉れないのかい」

「はい只今！」

お兼の可怖しい權幕に呆れて、ついお茶を出すことさへ忘れて  
ゐたお杉は、驚いて茶棚から茶器をおろした。

「清造は最う今夜限り家へは歸らないといふが、お前さん其れ  
で済みますかいかい」

とお兼はお杉の出した茶碗を取上げた。

「あのう、實は其事で、只今もお母さんに御相談致しませうと  
思ひまして」

「だめ／＼最う何も相談する處はありません、この堀川の家に

取つては清造は家の本尊、お前さんは外から来た人、それが  
一緒に居られないとして見れば、家に付いた者が出て行つて  
外から来た者が居居つてゐるてえ法はありませんからねえ、  
何とか其處を考へて貰ひたいと思つて、其れで態々来ました  
のサ」

云ふまでもない、明かに離縁の宣告である、清造は母を味方に  
引入れて慙慙宣告をさせるのだ、房子は悲しさよりも口惜しさ

が先に立つた、お杉さへ思はず下唇を噛みしめた。

少時は双方無言であつたが、聴いて、

「何うだい、お前さん慙慙に云はれても腹は立たないのかい」

と、お兼は凝乎と俯いてゐる房子を覗いた、鬢の毛が一二本頗  
に散つて、什麼も力のない悲しみを帯びた房子の顔が、夜目に  
は一入哀れに見えた。



(十五) 非常な決心

薄く短くなつた髪の毛を一本并べのやうにして、大切さうに小  
さな丸鬚を載せてゐるお兼の、色の浅黒い瘦た無愛嬌な横顔を  
お杉は臺所から覗いて憎らしい婆さんだと思つた、若し主人の  
母親といふ名が付いてゐなかつたら、釜の下の新雜棒で否とい  
ふほど擲つて遣りたいやうな氣がした。  
併し、お杉が恚に思ふほどお兼は悪人ではなかつた、詰り家  
のため、我子清造のためといふ理性ばかりが勝つてゐた、情熱  
といふものが乏しいために云ふ事から爲ることが什麼も冷たく  
鬼々しく見えるのである。  
素より爾ういふ姑の氣象であるといふ事は、惻愍な房子は平素  
から能く吞込んでゐたので、恚烈しい言を云はれてもお杉が  
脇で思ふほどには怨みに思はなかつた。

(家)

「本統にお母様に種々御心配ばかり掛けまして何とも申譯けが  
ございませぬ何故妾は恚だらうかと、自分で自分を叱つて  
ゐるのです旦那様の御機嫌を損じました段は、甚だにもお説  
び致しますから、何うかお母様のお取りなして、御機嫌を直  
してお歸り下さいますやうに、以來は屹と憤みますから。」  
と、房子は姑の前に手を支へた。  
それを熟と聽いてゐたお兼は、餘りに房子の辛抱強いのに驚い  
た、而して少しは我子清造の言葉を疑ひ始めた。  
「そりや説びて呉れなら説びても進げやうが今夜といふ今夜は  
清造は大變な決心をしてゐるやうです、房子を追出して呉れる  
か、私が追出て了うか、一つに二つ、今夜中に何方か極りを  
着けて呉れつていふのです」  
とお兼の聲は少し和らいだ。  
房子は何故其様な事まで所天に云はれねばならぬのかと、自分



の身を染々情けなく感じた。

『それでお前さんが出て行かなきゃ、自分が出て行く、其換りには此家にある一切の道具を悉な持つて行くつて、恚麼ことまで云ふんだが、お前さん何かへ其様なにまで仕られても此家にお居での考へかい？』

『はい』

と房子の聲は明瞭と、非常な決心が眉宇に顯れた。

『生意氣を申すやうですけれど、妾決心致して居る事がございませぬから、道具など何程お持ちに成つても構ひませぬ、空家のやうな家になつても宜しうございます、何時までも此家に置いて戴きましたして、一年でも二年でも、旦那様の機嫌が直つてお歸りの日を待ちます、去られて歸つたと申しておめ、實家の兩親に合す顔はございませぬ』  
多  
少  
の  
教  
育  
を  
受  
け  
た  
房  
子  
の  
決  
心  
は  
固  
か  
つ  
た。

『お前さん本統に其決心かへ、間違ひはなからうねえ』

『は、妾し死んでも此家で死にたうございませぬ、お母様を何處までもお母様と云はして戴き度うございませぬ……』

『房子さんッ』

お兼は今までの冷たさには似ず、遽に情に激した顔をして房子の手を握つた。

『分りました、お前の心は能く分りましたよ、何うぞ何時までも其心でゐて下さい、一時清造が甚麼ことを仕やうと、何事も斯も妾が見て居ますから、氣強く思つて、辛抱して下さい遠

からずお前さんの明の立つ時機は来るんだから』

人の妻としての優しい房子の心は、飽まで冷たい人の心もトウ

トウ動かし得たのであつた。

お杉は始めてホツと胸を撫つた、漸次に更けゆく庭の暗から、

縁日で買つて來た鈴虫の衰つた鳴聲が聞えた。



(十六) 夢の世界

強い烈しい感動のため神経が昇つて、房子は其夜一睡もしなかつた、長い寂しい秋の夜をトウ／＼泣き明して了つた、寤つて夜が明けたのに氣付いて、起上らうとして密と枕から頭を離すと風邪でもひいたやうに森々と痛みを覺えた、何だか夢の世界にでもゐるやうな氣がして、謂ふに謂はれぬ苦痛が其の身を襲ふた、それでも強て自ら氣を勵まして起上らうとしたが、什麼にも倒れさうな氣持になつて、堪らず又枕をつけた。

斯うしてゐる中に夜來の疲勞で何時の間にもやら眠るともなくトロ／＼としたかと思ふと、誰ともなく耳のはたで呼ぶやうな氣がして、ハツと眼を覺すと、

『おい起きないか、何うしたんだ』

といひながら所天清造が昨夜出て行つた時の服装のまゝで、

←(家)→

怖い顔をして立つてゐた、

『おや、お歸りなさい！』

『お歸りなさいもあるもんか、最う何時だと思つてるんだ、八時だせ』

『まあ、妾何うしませう、貴方御免なさいね、ほゝ』

房子は周章て床を上げ着物を着換へた、清造は依然として突立つた儘それを見てゐたが、洋服のかくしからマツチを出して、

パツと敷島に火を點け、

『貴様昨夜お母さんに甘い事を云つたね、お母さんは全然貴様の甘言に欺かれて、頻りに俺に強意見だつたが俺は俺で又貴様の不都合な點を一々列挙してやつた、流石お人好しのお母さん、お母さんも驚いてゐた、はゝ』

嘲けるやうに冷笑した清造は房子が何か云はうとするのを、押へるやうにして』



「さあ、今朝は昨夜の約束通り俺の道具を取りに来たんだ、お母さんが何と云つたつて、誰が何と云つたつて、俺には俺の決心があるんだから其れを實行するんだ、恚にいられても貴様この家に居りたきや、何時まででも勝手に居るが可い、家賃だけは負けといてやるから」

何といふ憎い言葉であらう、恚にいらし、着白な顔をして精も造は昨夜一夜を泣明して兩の眼を腫らし、蒼白な顔をして精も力もなく其場に泣倒れてゐる優しい妻を哀れとも思はないのか

「おい杉や、早く来てくれ」

と高い聲を出してお杉を呼立て、

「表に荷車が待つてゐるだらう、あれに此處邊らの道具を残らず積んだから手を貸してくれ」

机に書棚に本箱火鉢、額やら掛物やら花瓶やら、座敷中の一切の装飾物から箆筒洋服箆筒、支那靴に柳行李、其他種々の道具

類を手當り次第に引出した、その光景は宛然轉宅騒ぎのやうであつた。

お杉はおろ／＼しながら兩の眼に涙を溜めて、

「旦那様これを何う遊ばすのです、何か存じませんが、若し奥様にお悪い處がございましたら、私しからもお詫を致しますから」

「え、何を云つてゐるんだい、お前の知つた事ぢやない、愚圖々々云はないで早く手傳はないか、サアこの箆筒を擔ぐんだ」

房子は唯もう淺ましいと思ふばかりで詫する力も争ふ力らもなかつた。

(十七) 雜司ヶ谷

三臺の荷車に山と積上げられた、家財道具は、清造の指圖に従ひ六人の人夫が先挽後押をして處へか持つて行つて了つた、



家の中は俄にガランとして丸で空屋同様に成つて了つた、房子が實家から持つて来た總ての調度と、臺所道具計りが取殘されて、冬枯の雑木林のやうに疎らに寂しく見られた。巻煙草を煙らしながら清造はこの淋しい家の中をキョロ／＼見廻し、

「はゝはゝ、是れで可い、是で可いちや房子さん、僕はマア當分歸つて来ません、慥麼がらんどうの中にも居たくば何時までゝも勝手におゐるでなさい、飽いたらサツサと本郷へお歸りなさるが可い、はゝゝ、どりや行かうか」

これを最後の捨臺詞として、清造は待たして置いた腕車に乗つて、是れも何處へか去つて了つた、房子は泣倒れたまゝ殆んど正體がない程であつた。

それから三十分程の後、清造をのせた護謨輪は小石川の目白臺を走つてゐた、聽て高田の通りを右に折れて、雜司ヶ谷の鬼子母神の森の後ろを晴れ／＼とした田圃道へとかゝつた。

「おい堀川、此處だよ／＼」

太い濁つた聲が今通り過ぎた杉垣の中から聞えて、眞角な盤大面がぬツと現れた、

「はッはッはッ、何うしたんだい、我家を忘れるといふ事があるかい」

「そりや最う、辛い別れをしていらしたんだもの、氣が顛倒してるわ」

小山の揺ぐやうな秋山種郎の後ろから表情に富んだ華やかなお龍が笑ひながらに出て来た、

「むゝ爾うだつたねえ、僕ア最う少し先だと思つて行過ぎちやつた、はゝゝ」

と、清造はヒラリと俥から降りて、

「今荷物を積出したから、聽て来るだらう」

「はッはッはッ、能く君に其れだけの勇氣が出たね、はゝゝ」



「奥様驚いてゐらしたでせう？」  
 「驚くも驚かないも、彼様な奴は眼中にないんだ、併し昨夜彼奴め旨く母に取つたもんだから、長々と母のお説教を聞きなれて、頗る恐縮したが騎虎の勢ひ今更ら何うすることも出来なから何でも斯でも無茶苦茶から斷行してやつた、はゝゝ」  
 「ほゝゝ豪い勇氣だわ」  
 「はッはッ實は何ぢや、此方は昨夜から君が軟化しやしまいかと思つて大に心配してゐた處だ、しかし何しろ芽出度い」  
 話しながら清造は飛石づたひに座敷の縁の方へ行つた、  
 「成程、斯うして來て見ると、此家も中々好いねえ、庭も廣いし、第一閑静だし」  
 「そりや好いとも、彼様な氷川町のやうな建て詰まつた處から見たら何ほ好いか知れない會社へ通ふのだつて、此處から電車の江戸川終點まで何程もありやしない、これで十二圓の家

(十八) 新生涯

賃は安いせ

「むゝ爾うだ」

清造は満足氣に頷いて、更に家の内を見廻した、是れも昨日の中に一切の準備をして置いて、今朝未明に濱町を挽出して來たお龍の家の道具が、家中一杯に成つてゐた。

雜司ヶ谷の秋は大分閑けてゐた、その家の椽に立つて見渡すとすつと田や畑が続いて、遠く池袋から落合村の方まで展開して見られた、稲は眞黄になつて、時々鳴子がカラ／＼と鳴つてゐた、鬼子母神の森は黒づんで、其中から鱒口の鉦の音が鈍い響きを傳へた、市中には見るもの聞くもの盡く新らしく感じた。秋山は黒い太つた身軀を赤裸々になつて、箆筒を据付けたり棚



を吊つたりして働いてゐた、お龍は白い手拭を被り赤い襦袢を掛  
 けて、冴えた元氣の好い聲で喋りながら、濱町から連れて来た  
 下女のお清を相手に臺所を整理してゐた何處からか秋山が雇ふ  
 て来た人足の爺は庭廻りを掃いたり椽を拭いたりしてゐた。  
 清造は何をするといふでもなく、外を眺めたり家中を見廻した  
 りして時間を消してゐたが、其れから其れへと綺麗に形付いて  
 ゆく家の體裁を、椽端に腰を掛けて見ながら何だか斯う新らし  
 い生涯に入るやうな氣がして、哀れなる房子の事などは念頭に  
 も浮ばなかつた、秋山の盤大面ははやくと笑を湛へて無雜作  
 に黒い五體を包んで帯をしめしめ。  
 『さあ、是れで全然濟んだぞ、何うだ堀川、恁うして見れ  
 ば餘り悪い氣は仕なからう』  
 『む、中々好い、氣に入つたよ、はゝは』  
 『氷川町よりや遙に好からう』

「む、」  
 「しかし自分の心からは云ひながら妻君は可哀さうなものだ  
 君未練が残りやしないかね』  
 と、秋山はニヤリと笑つてお龍の方を見た、お龍は其時鐵瓶の  
 湯を急須についでゐたが、ちらりと秋山を見返して含笑んだ。  
 『莫迦！』  
 と清造は苦笑して空を仰いだ。  
 『だけれどお可哀さうだわ、明家のやうな家に取残されて、甚  
 麼に悲しいでせう、妾なら死で了うわ』  
 とお龍は秋山と清造に茶を進めた。  
 秋山は其れを喫みながら、  
 「ところが存外氣樂で好いと思つてるかも知れない、ねえ堀川  
 何とか云ふ奴だつたねえ。うむ、爾うぢや、塚田、塚田  
 時雄とか云ふ不埒な奴が丁度好い幸ひにして毎日のやうに入



り浸るかも知れないテ、はッはッはッ  
『甚麼奴が来やうが俺には最う關係は無いんだ、那麼して置け  
ば其日の生活が出来ないから、本郷の實家へ歸るかそれとも  
塚田の奴の許へでも行くか、何れ遠からず何うにか成るだら  
う』

と清造は苦い顔をした。

『けれど何ぢや、是が所謂る雨降つて地固まるぢや、君が吾輩  
の忠告を入れて爾ういふ風に斷然たる處置をした上、斯うし  
てこの閑静な郊外へ引移つたのは何より幸福ぢや、君等兩君  
の萬歳は勿論、吾輩も君等が近隣へ来てくれたので賑か好  
い、はッはッはッ、その代り、小使が無くなつたり兵糧が切れ  
たりするとドシ／＼借りに来るぞ、はッはッはッ』  
秋山は獨りで面白さうに笑ふのであつた。

(十九) 放縱な生活

什麼も詩的な雜司ヶ谷の秋、何時も浮々と華やかなお龍の笑聲  
この二つが快樂主義の清造には非常な満足と與へた、お龍は濱  
町に居た時よりも、此處へ来てから一入牙々と若やいだやうに  
清造は思つた、人間生活の愉快といふのは正に慙麼のであらう  
とまで思つた是といふ定つた職業のない秋山は、清造等が此處  
へ来てから毎日毎夜のやうに遊びに來た、而して盛んに酒を飲  
んだ、高田の通りの鰻屋や仕出し屋からは毎晩岡持を提げて來  
た、日曜日などは朝から酒に浸つてゐた、斯うして放縱な生活  
はしてゐたが、其れでも清造は不思議に會社だけは缺勤せず  
通つてゐた。  
清造は甚麼苦勞をしても二人同棲したいといふお龍の甘い言葉  
と、其れを傍から賛成して頻りに煽て上げる秋山の辯口とに釣



込まれ、秋山を頼んで此の家を借受け、何の罪も科もない貞節  
 無二の房子を捨て、斯うした生活をする事に成つたのであ  
 るが、この甘い歡樂は最初清造の豫期したやうに爾う長くは續  
 かなかつた、雜司ヶ谷の秋がハラ／＼落ちる木の葉と共に漸次  
 に冬に移りゆくやうに、清造の新家庭にも聽てそろ／＼風が吹  
 き出した。  
 芳烈な花の薫りも、絶えず嗅いでゐれば鼻の感覺が鈍くなつて  
 そして其香を感せぬやうに、浮々と華やかに陽氣で善いと思つ  
 たお龍も、斯うして毎日傍に置いて見れば、いや夫婦同様にし  
 て同棲して見れば小間使として曾て家に在つた時や、妾として  
 濱町に圍つて置いた時とは、大分其趣が異つて来て、清造の眼  
 に映じた美といふ點が漸く薄らいで、ちら／＼其缺點が見え出  
 して来た、それに蒼蠅が毎日、のやうに来て酒を飲む秋山のづ  
 う／＼しさが、何となく不快に感じられて来た。

清造の發見したお龍の缺點といふのはお龍が女として餘りに放  
 縱で物に無頓着な點であつた、女らしい儉約いところだの、家  
 の爲を思ふ優しきなど、微塵もなかつた、財布の中の金は何程  
 でも底から湧て来るとでも思つてゐるのか、何の計算もなくバ  
 ッパと使ひ捨て、夢にて小使帳などは手にしなかつた、臺所の  
 手料理は面倒がつて絶えず下女のお清を仕出し屋へ走らしてゐ  
 た家の内は散らかつて放題に散らかして、押入の中や箆筒の抽斗し  
 の中などは亂雑を極めてゐた、總てに不秩序不整理で、到底人  
 の妻として家庭の主婦たるべき資格はなかつた。  
 恣意な生活をしてゐるために、僅か十二圓の家賃を拂ひな  
 がら、月々の支拂ひは百圓の上を遙に越してゐた、いかに快樂  
 主義の清造も斯うした不節調な生活振りには快いととは思はれな  
 かつた、それと同時に浮々と落ちて来るお龍の容子が遠に疎ま  
 しくなつて来て折々は房子の何處までも女らしい優しきみやら、



家を齊へることの飽まで行届いてゐる處が思ひ出されもした、  
而して清造は其不愉快を醫するため、更に又他の快樂を求めて  
三日に一度は何處かで泊つて来るやうに成つたのであつた。

(二十) 毛糸の内職

「そりやお前の考へも道理だけれど、母さんはお前が斯うして  
おゐるのを見てる眼が堪らないから、何とか考へを仕直して  
は何うだい」

打濕つた聲で染々と斯う云つたのは房子の母親辰子であつた、  
辰子は昨日今日の苦勞に面瘦て、頬の肉がげつそり落ち遽に年  
齡が三つ四つ老けたやうに見られた慥に自分の衰へてゐるに  
は氣が付かず、火鉢を隔て、悄然と俯頭してゐる我子房子の、  
半年前とは見違へるほど瘦衰へた姿を見て、悲しさやるせなさ  
が胸一杯になつて、泣くまいとすれど涙は泉のやうに湧いて來

るのであつた。  
房子は所天清造は亂暴な家出をしてから何の裝飾もない明家の  
やうな家を守つて、忠義な下女のお杉を相手に心細い月日を今  
日まで送つて來たのであつたが、過去百日餘の房子の苦勞は口  
にも筆にも盡せぬほどであつた、さらぬ放埒な所天は家に居る  
頃から随分無理な負債もしてゐた、料理屋や洋服屋の仕拂だけ  
でも嘘のやうに夥しいものであつた、其れさへ打捨てゝ出て行  
つて了つたので、房子は其れや是れやの穴を塞ぐため實家から  
持つて來た二棹の筆司は大概空にして、了つた、其れで當座の負  
債だけは漸く形が着いたのであつたが、手許に一錢の貯蓄ない  
身には、お杉と二人暮しの其日にさへも差支へた、慥なもの  
本郷の父に相談すれば何の仔細もないのであれど、房子は決し  
て父にも母にも頼らなかつた、たとひ一言でも心配らしい事を  
老たる父母に聞かすは、子として親に對する孝の道にあらずと



いふ、世にも優しい孝心から、自分の苦勞は自分一人で止めて了う決心をした、而して其日其日の口糊をするため、お杉と額を鳩めて種々と相談した上、お杉が日本橋の糸屋に知邊を持つてゐる處から考へ付き、房子は内職に毛糸の靴下や巾着の編物をして、僅少な賃錢で約しく其日其日を過してゐたのである。慇懃にしてゐる中には、所天清造も何時かは良心に立戻り、一度は家へ歸る時節もあるであらうと、所謂頼み少い頼みを頼みにして、清造が家出してから、秋去り冬來り、今年も最う餘すところ十餘日となつた今日まで、堅固に送つて來たのであつた房子が慇懃な境涯に成つたのを、何時しか本郷の實家で清造の兄や母に談判し、一方は房子は非常に驚いた、而して一方はを切つて歸つて來てはと勧めましたのであつたが、房子は何處までも其れを否んだ、筆司町の方からは不得要領な返辭ばかり

して、鰻や鮎を棒切れで押へるやうで、更に捕へ處がないので一徹者の父の義一は烈火の如く憤り、此の間から毎日のやうに母親辰子をして房子の今の決心を翻へさせやうとした、今日も辰子は午餐を了うと直ぐ其事で態々來て、先刻から殆んど一時間以上も説いてゐたのであつた。『何うだい房子さん、思ひ直す事は出來ないかい』と、辰子は房子を覗くやうにした十二月の寒い風が障子の破目から吹込んで、火鉢一個の他には何の道具も置いてない茶の間は、古寺の本堂に座つてゐるやうに森々と寒氣は身に沁んだ。

(三十一) 良妻賢母

房子は母にばかり喋らせて黙つて俯頭してはゐたが、何處までも慈愛で固めた親の情けを嬉しいと思つた、老たる親に慇懃苦勞を懸けねばならぬ自分の運命を果敢なんで、熟々聽けば母の



説く處は、一々道理で兎の毛ほども非の容れどころがなかつた、  
 小間使に仕立てた妾を持ちながら、潔白らしい顔をして妻を娶  
 つたり、その妻をつた妻を扱ふやうな氣で玩弄したり、  
 の性格が自分快樂を満足せしめ得ぬからといふて、其妾を外  
 に園ふた上、果は家を捨て妻を捨て、妾と同棲するなど、清造  
 の素行は人倫に悖り道徳に反し、夫婦の間、優しい愛情といふ  
 ものは微塵もないこと、斯うした所、天は假令近き將來に元の鞘  
 に納まるも、遠い行末にさうした所、天は假令近き將來に元の鞘  
 箆町の清造の母や兄が、我子や舎弟が恚罵不仕鰥をしてゐる  
 のを他に目と鼻との間に居ながら哀れな嫁に助勢をして呉  
 れぬといふ事やら一々數へ立てる母の言葉は愚痴ばかりでもな  
 かつた。  
 けれども、房子は只一點自ら信ずる處を行ふて見たかつた、房  
 子が今の理想は、斯ういふ悲惨な場合に、縁あつて一旦嫁付い

た身の、人の妻として取るべき道！、世には随分放埒な良人を  
 持つた妻も多からう、其れらの人が自分と同じやうな境遇に遭  
 つた時、人の妻として取るべき道！、その模範を世に示したい  
 のであつた、いや名譽や虚榮のために世に模範を示したいので  
 はないが、一つには渠が學校時代から私に理想としてゐた良妻  
 賢母主義、その高い理想を現實に行ふて、操正しい自分の行ひ  
 で、不言不語の間に放埒な所、天の心を感化しやうと思ふのと、  
 二つには渠は此時最う清造の胤を宿してゐたのであつた、され  
 ばこの理想のためと懸て生るゝ所、天の胤とのため、自己の一  
 身を犠牲にして何處までも戦ふて見る決心であつた、あゝく  
 何といふ哀れであらう、何たる健氣な決心であらう、斯うした  
 房子の人格は實に人間以上、神に近いと云つても差支へはない。  
 我子に恚罵高い理想があるとは、辰子は知らなかつた、是れは又  
 親としての優しい慈愛の心から、哀れな我子を這の境涯から救



ひ出さうとして、言葉を書して尙ほも頻りに説き勧めた、

「母さんはお前の貞節な心や、優しい其心は能く知つて居ます

母さんばかりぢやない、お父様もお前の此の間からの決心に

は感心しておいでだつた、房子は流石に俺の子だ、教育の仕

甲斐のあつた立派な者だつて、それは、欣んでおるでは

なつたが、ねえ房さん、能くお聴きよ、親といふものは寒い

につけ暑いにつけ我子の事には心を砕くもので、お前が慥

情けない身の上になつてゐると思ふと、お父様は男だから口

へ出しては仰しやらないが、妾は、妾は……」

辰子は堪らなくなつて、袖を顔に當てて泣いた、房子も胸が切

なくなつて、我知らず膝を進めて母の手を捕つた、

「母さん、勘忍して頂戴、何も斯も妾が至らぬからです、お父

様や母さんに慥御心配をかけるのも、悉な妾の心が行届か

ぬからです……お言葉に従つて歸るのが道でもありません

が……、母さん、妾、おなかには胎兒が……、最う月のもの

を四月も見ません……」と嘔り上げた。

先刻から密と臺所の隅で聞いてゐたお杉も、この切なる母子の

會話に悲しくなつて、その悲しさを堪へることが出来なく思は

す聲を立て、泣いた。

(三十二) 二度の良人

最う正月に間もないといふので、近所隣家では來ん春を待つ準

備とり、に時々陽氣な笑聲さへ聞えた、けれども此處では春

の來さうな空氣もなく、薄ら寒い茶の間と臺所の隅とで、主従

三人が稍少時泣入つてゐたが、

「月のものを見ないつて、房さんお前本統なのかい、嘘ぢやあ

るまいねえ」

と、辰子は漸と手巾を取出して涙を拭いた。



房子も涙を拭き、

「え、五月だらうと思ひますの……」

「寂しく自分の帯の邊を見た、  
「そりや大變だ、而して最う産婆に見てお貰ひだつたかい、五  
つ月といへば帯をしなけりやならないから」

「産婆には未だ見せませんが、確乎に其れだと分つてますの」  
「困つたねえ、何てまあ恚に都合が悪くばかり成つて行くん  
だらう、其様なに身重であるとして見ると……」と、辰子

は凝乎と眼を据えて房子の胸の邊を凝視めてゐたが、聽てホッ  
といふやうな息を吐いて、  
「お前其様な身軀に成つて了つて、本統に何うしやうとお思ひ  
だ？」

「ですから母さん、妾お言葉に背いて濟みませんが、何時まで  
も恚うしてゐて、たとひ清造は此儘歸らなくつても、生れた

房子を立派に養育してゆく考へですの」

「實はねえ房さん、お前が爾ういふ決心だから云ふが、お前が  
思ひもよらぬ恚身の上に成つてるといふ事を此の間始めて  
知つたのは、それ彼の塚田さん、今は立派な銀行員に成つて

おいでの、彼の塚田さんがお出でになつてお話しだつたので  
清造さんがお前を恚にして家を出て了つた事や、其他の事  
も知つて、遂にマア恚騒ぎを仕出したのだが……」

と、辰子は少時口籠つたが、  
「塚田さんの奥様、あの京子さんといふのは朝鮮でお亡なりな  
すつたんだつてねえ」

「え、其様な話でした」  
「それで塚田さんの仰しやるには、京子も那麽に亡なつたのだ  
し、房子さんは那麽お氣の毒な境遇で、逆も未來長く堀川君



との縁も継続しますまいから、若し貴方がたが房子さんをお取戻しに成るやうだつたら、此際私の方へ何して貰ふ事は出来ずまいか、貴方の御意向が若し私のお願ひを叶へて下さるやうであつたら、房子さんが離別して當家へ御引取りに成つてから、改めて正式の媒介者を以て申入れたいのですが………ッて恚ういふお話しだつたの』

『而して母さん何て仰しやつたの？』

『房子の眼は怪しく輝いた。』

『何てッてお前、妾だつて確乎としたお返事は出来ないから、好い加減に挨拶して置いたんだが、内々は妾も彼の方ならばといふ考へもあつたのだが………』

『まあ！、母さんまでが其様な』

『さあ其時のお前の心は知らなかつたからねえ』と、辰子は多少恥入つてゐた。

『母さん妾萬々一、此家を去られて歸る事に成つても、二度の良人を持つ氣はありませんことよ』と房子は寂しい笑顔をした。

(三十三) 白髪の老人

灰色に曇つた十二月の空は、寒い鋭い北風につれて今にも雪に成りさうであつた、辰子は石にあらねば動かすべからざる我子が堅い決心に、半ば感動し半ば屈托して、俥にも乗らずコトに頭巾といふ妾で、溜池の通りをお堀端の方へ、下ばかり向いて考へく歩いてゐた。

此處の停留場で電車に乗れば、宅へ歸るまで最う歩くところは何程もないのであるが、心此にあらざる辰子は、電車に乗るのさへ忘れて、何時の間やら丸の内へ入つて了つた、其れが辰子自身に氣の付いた時には、彼女は山王下の寒い木の下に立つ



『おや、慙とところへ来て了つた！』  
 辰子は自分で自分を冷笑した、而して不圖四邊を見廻すと、自  
 分の立つてゐる處から十間許り先の、屋根の低い数寄屋めいた  
 小さい風雅な家の戸口に、『安心立命、神易活斷』といふ看板の  
 かゝつてゐるのが目に付いた。  
 『易を見て貰はう！』といふ考へが稻妻のやうに頭に閃いた、  
 弱者の迷信！否、眞逆爾うでもあるまいが人は心の煩悶に堪え  
 ぬ時は、自然と人間以外の崇高なる甚麼東西に便らうとするも  
 のだ、心の亂るゝ時、思慮にあまる時、學識才能を備へた堂々  
 たる六尺の大男兒さへ此事を敢てする例は少くない況んや弱い  
 心の優しい婦人の辰子をやである。  
 辰子は柴の戸ぼそめいた入口を入つた而して庭に立つて縁の障  
 子の外から案内を乞ふた。

『お上りなさい』

重く沈んだ聲と共に、内からサラリと障子が開かれた、聲の主  
 であらう、前に小形な一脚の机を置いて、机の上には算木と筭  
 竹、長い願の鞆から頭の毛までが雪のやうに白い、瘦た威嚴の  
 ある老人が嚴然として控へてゐた。  
 辰子はこの老人の態度容貌を見た丈で最う崇拜の心が充分昂つ  
 た、老人の指圖に従ひ、辰子は上へ上つて取り敢へず時候の挨拶  
 からした。  
 座敷は六疊敷で、座に長物なく、何一つ飾り立てたものもなか  
 つた、床の間に只一軸、明人の書めいた掛物が掛けてあつた、  
 是れだけでも主人の人格が釋まれて、何々先生門人などといふ  
 所謂易者とは大分異つて辰子は頼母しく思つて、我子房子の今  
 の悲惨な境遇から、連添ふ所天清造の放埒な次第を其れとなし  
 話して、房子の運命の判斷を請ふた。



白い顔の髻を握りながら、疑乎と其れを聴いてゐた老人は、重  
い口を徐に開いた。

九〇

『よし、分りました、貴女は其仁の運勢それから、夫婦間  
の干係やら吉凶やらを見て呉れと仰しやるんぢやな』と、分  
つた事に念を押してゐた。

『はい左様でございます、無理からでも里へ引戻して宜しいも  
のやら、あの儘で置きましたものやら、是れから先は甚麽こ  
とになりますことやら……』

『よろしい、然し一寸断つて置くが私は變人ぢや、人にお世辭  
を云ふ事を知らぬ、また悪いものを態と善いといふ事は出来  
ぬ、易に顯れた其儘、詰り神様のお示しの儘を容捨なく露骨  
に云ひますぞ』

『え、宜しうございますとも、其れが何より結構でございます  
す』

辰子は老人の餘程異つてゐるのを見て深い山奥へ分入つて測ら  
ず神仙に逢ふたやうな気がした。  
夕暮近い日枝神社の森では、木枯しの音が高かつた。

(二十四) 風火家人

多くの易者とは大分異つた點のある不思議な易者、白髪白髻鶴  
のやうな老人は、徐に筮竹をとつて押戴いた、兩眼を閉ぢ、神  
を凝らし、太極を一本取つて、残る四十九本の竹を無念無相で  
兩分した、その態度が何となく神々しく聽てバチリ、バチリ、  
と細い長い竹の数を數へる音が、この寂とした山王下の空気に  
漂ふて、辰子は或る神秘に接するやうな気がして、思はず襟筋  
にぞつと寒氣を感じた。  
斯うして筮竹を數へてゐた老人は、カラ／＼と机の上の算木を  
返した、辰子は不知不識首を伸して其れを覗いた。

九一



「む、成程」と老人は獨りで感心して算木を呪んでゐたが、直ぐ其眸を辰子に轉じて又重い唇を動かした、

「あゝ感心な事ぢや、貴女のお娘御は當世には得難い貞女ぢや」

「え、何でございます？」  
「御心配なさる事はない、今はお話しのような家庭の波瀾に漂ふて苦しんでゐられるが、必らず遠からず圓滿な終局を見ることに成るな」

「では彼の儘置きましても宜しいので？」  
「勿論ぢや！、此處に出た卦は風火家人といふのぢや、御覽なさい、この下が離の卦で火の象、上が巽の卦で風の象ぢや、孔子の説かれた象には風火より出るは家人なり、君子言物あるを以て、行ひ恒あり、と説いてゐられる」

老人はそろ／＼六ヶ敷い事を云出した、それが辰子には充分會得が出来なかつた。

「自體この家人の經には『家人利女貞』とある、家人は一家の人で一家は婦人を以て主とせねばならぬ、よろしいかな、而して家を齊ふの道は夫婦より始まるのぢや、婦が内に正しければ家道は必らず治つてゆく、この卦の男女の正位を得てゐる、それで聖人は女の貞に利しと説かれたのぢや」

何となく意味が深いので、愈々辰子には解しかねた、其れと見て老人は更に説明を續けた、

「故に孔子は象に於て更に斯う云つてゐられる、『男女の正しきは天地の大義也、家人に嚴君あり、父母の謂なり、父は父たり、子は子たり、兄は兄たり、夫は夫たり、婦は婦たり、而して家道正、家を正うして天下定矣』といふのぢや。詰る處今の辭で云へば家族主義、其れぢやのウ」

老人は得意になつて頻りに白髯を撫した。  
「貴女の娘御は、連添ふ人の放埒なのを心に慍らず、何處まで



も人の妻たる道を盡して行かうとせられる、ソレ何うちや經の辭の女の貞に利しといふに叶つてゐる、甚う理窟を云ふやうちやが、私は此頃流行する女の自覺とか何とかいふ辭、あれは何を自覺するのぢや、大抵な人はこの自覺の辭を曲解して、婦人は何時までも家庭内の奴隸同様に成つて、男子の壓迫を受けける理はない、一日も早く自覺して、婦人の本能を發揮せねばならぬ、その權威を保たねばならぬ、といふやうな議論もあるやうぢやが、私は婦人の自覺といふのはこの夫は夫たり婦は婦たりといふ其れを自覺さへすれば、可いのであるらうと思ふ、嗚、貴女は爾う思はれないかナ？」

老人は吉凶を説くよりも議論を仕出した、辰子は愈々この老人は只者でないのを覺つて、謹んで聴聞してゐた。

(三十五)

大吉

短い冬の日はそろ／＼暮れさうに成つて来た、山王の森をうけたこの座敷は大分暗くなつて来た、けれども老人は其様な事は一切無頓着であつた、興に乗じて更に其重味のある聲を振立てた、

「先づ貴女、一寸考へても、直ぐ分らうぢやないか、この宇宙ぢや、天があれば、地がある、陽があれば必ず陰がある、表と裏、晝と夜、何でも斯ういふ風に成つてゐる、人に男女があるれば即ち男と女に區別がなければならぬ、聖人はこれを此の風火家人で説いてゐられる」

こゝまで聞いて、辰子は始めて合點がついた、而して感に入つて頷いた、

『この家族主義は我國の國體にがつしり叶ふた教、この後何程世が進歩しやうが、文明が發達しやうが、日本人は飽までもこのこの教に從はねばならぬ、千萬年の末までも之れを固守せ



ねばならぬのちや迂乎と横文字に囚はれてはならぬ、國土と人情風俗、それに能く合した制度でなくては可かぬのちや、私は現代の女學生などが、斯ういふ心持ちで勉強が仕て欲しいと思ふ、貴女の娘御が、新しい學問をされた方にも似す不健全な志操に囚はれないで、自分の苦痛を忍んで貞女の道を守つてゐられるといふのは實に感心な事ぢや、聖人の心につてゐる、聖人の心につた事に什麼で凶があらう、神の心にも叶つてゐる、神の心につた事に什麼で凶があらう、吉ぢや、大吉ぢや！

大吉と聞いて辰子は嬉しさに胸が騒いだ。老人はカタ／＼と算木を動かして、

『それ御覽なさい、此通りぢや、この卦は四爻が動いてゐる、四爻變ぢや、爻の辭には富家大吉とある、この六四は能く家道を治め、一糸亂れず婦人の天職を盡し、家庭を整理して

ゆく勤めを充分に終り、今退いて外に在り、退くといふて、所天の家を去るのぢやない、能く妻たる道を盡し終つたといふ事ぢや、是れ即ち婦徳の至りで、家の富む象である、大吉でなくて何である、お話しのお容子では貴女の娘御は此徳に叶つてゐられる、大吉ぢや、今の苦勞は遠からず去つて了つて、御亭主も歸つて來られるし、家も繁昌する』

『まあ、爾うでございますか、では彼の儘に致して置いて宜しいのですね』

『勿論のこと、それを兎や角云つて離別などせうとすると、吉は變じて忽ち凶となる、能々慎まねばなりませんぢや』

『で御座いますかねえ……』

『決して御心配なさるな、この卦を御亭主の方から見ても後には屹と歸つて來られる形ぢや、聖人はこの家人を地下明夷の次に續けて置かれた、明夷は破れ傷つくといふのぢや、人が



外で破れ傷ついたなら、必と内へ歸つて来る、當然の理で、御娘御の御亭主は外で破れて家へ歸られる、而して家人と成るのちや、ソレ何うちや、夫子の所謂る夫は夫たり婦は婦たりと成る、御安心なさい、來年の三月、それでなくば四月頃には屹と歸られるやうに成ります』

斯う云つた老人は更に感嘆の聲を發して、

『しかし感心な御仁ちや、得難い御婦人ちや、良妻賢母の模範といふても可い、何うぞお歸りなされたら此易の辭と、私の説明を話して下さい而して益々家庭の主婦たる誠の道を盡して下さいと傳へて下さい』

と、念を押すやうに云つた。

辰子は吉占を得たのが嬉しく、今まで結ばれてゐた胸が解けたやうな氣がして、氣が晴々として自と笑顔に成つた、

『有難うございます、あの御禮は如何程差上げます？』

『見料か！』

老人は屹と氣色を損じて辰子を睨た、

『私は斯ういふ貞女を占つたのを榮譽とするのちや、見料などは要らぬ』

『まあ！』

辰子は呆れて了つた、けれども愈々この老人の尊さを感じて、若しや房子を守らせ給ふ神の化身ではなからうかと思つた。

（三十六） 意外な質問

不思議な易者の豫言が果して的中するものであるか甚麼であるか、當るも八卦當らぬも八卦といふ言葉を思ひ出して、辰子は何となく頼み少いやうな氣もしたが、老人の人格の氣高いところを思ふと、頻りに崇拜の念が兆して其言葉を疑ふてはならぬと思つた、別けて房子を良妻賢母の模範であるとして褒められた



のが、嬉しくて、堪らなかつた、而して家へ歸つて所天義一  
 に此事を話すと、義一は只笑つてゐるばかりであつた。  
 易者の所謂眞女といふのであらうか房子の決心が餘りに堅い  
 ため、親ながら義一夫婦も何うする事も出来なかつた、只毎日  
 毎夜、寄ると觸ると房子の噂ばかりして暮した、併し其れは何  
 時小田原評議に終つて了つた、尤も房子には最初五千圓とい  
 ふ持參金を添へる約束もあり、現に其金は父の手許に保管して  
 ゐるのであれば、義一夫婦は相談の上、當分其中から月々五十  
 圓宛仕送るといふ事にした、けれども房子は其れを斷つた、  
 「思し召しは難有うございませうが、元々のお金は妾の持參金  
 で、追ては堀川家の財産の中へ數へるもので、其れを所天の  
 許可なく妾が自儘に使つては濟みません、妾は斯うして自分  
 の力で何うにかしてゆきますから何うか御心配なさらすに措  
 いて下さい」と、什麼も筋目立つて立派に斷つたのであつた。

斯る中に其年も暮つて、新玉の春は、一月二月も夢の間に、梅の  
 眞盛りの三月中旬に成つた、房子は相異ならず悲しい心細い光陰  
 を、一生懸命に内職して過してゐた。  
 斯うしてゐる中にも、房子は只ならぬ自分の身の、次第に月が  
 重つて最早や臨月も眞近く、時々横腹で動くやうに感じた、腹  
 の子が動く度に房子は謂ふに謂はれぬ悲しさを覺えた。  
 「御安心遊ばしませ、恁麼にお動き遊ばすほどですもの、中々  
 お丈夫でございますよ」といふ産婆の世辭が却つて悲しかつ  
 た。  
 或日の朝であつた、思ひ懸けなく所天清造の同僚である、會社  
 の副支配人の三田村與四郎が突然訪ねて來た。  
 與四郎は座敷へ通されると何の裝飾もない家の内をジロく眺  
 めてゐたが、木綿物づくめの寝れた房子の姿と、この家の體裁  
 とを染々見較べて、



「しかし奥様、失禮な事を云ふやうですが、此の御家の御容子は、何うしたのです、丸で明家……、は、失敬な事を云ふやうですが、全體何うなすつたんです？」

房子はハツと思つて顔が熱つた、何と答へて好いのか躊躇して俯頭いた。

「ふむ、ぢや矢張り噂の通り、堀川君が持つて行つて了つたんですね、随分亂暴な事をしたものだ」と、與四郎は嘆息したが、急に容姿を改めて、

「時に奥様、私が今日態々伺つたのは他でもありません、堀川君の御母堂から頼まれて参つたのです」

「は……」房子も思はず襟を正した。

「此の頃世間の噂では、堀川君が那麽して家を出られてから、貴女は其れを好い事にして、他の男子と何してゐられるといふ事で、其人はしばしば此家へ來るといふ噂ですが、事實で

せうか」

「まあ、何故其様なことをお訊ねなさるんです？」

房子は意外な與四郎の質問に、驚きの眼を睜つて與四郎を瞻た

(二十七) 寧大膽

與四郎は房子の心の底まで釋み取らうといふ、疑ひ深い眼をして、

「何故つて、世間に爾ういふ噂があるからです、實は笹筒町の方でも其噂をお聞なすつて私に事實を確めて呉れと斯う仰しやるので、は、真逆貴女に限つて其様なことはあるまいとは思ふが人間といふ奴は兎角感情に動き易いもので、随分相手の出やうに依つては、面當とか自暴自棄とかいふ意味で心にもない事まで仕て見るものです、私も貴女が當家へおいでになつてから、蒼蠅い程お伺ひして、貴女の御性行は能く



知つて居るですが、今度の堀川の行方といふものは餘り亂暴過ぎたです、だから貴女の感情が餘程亂れたと思ふのです  
が……」

『では三田村さん何でございますか、妾は清造に捨てられて心が亂れ、其れで自暴から不品行な事をしてゐると仰しやるんですね？』と、房子は腹立しさに平素の慎ましやかなのにも似ず、睨むやうに屹と與四郎を睨み入つた。

『は……』、其様なに激されては困るが早い處お母さんが爾ういふ意向でゐられるので、其れをお取次ぎするまで入す、私には恚使ひは仕度くはないが、堀川君と多年の交際上、頼まれて見れば斷りもならぬので、實は否々ながら貴女に憎まれに來たのです、だから何です、若し貴女に暗い點がなければ恚麼結構な事はないので、私は喜んで其れを復命するのですすから悪く思はないで下さい、私は何處までも貴方の味方

に成りたいのです、筆筒町のお母さんも、あれで中々氣むづかしやだが又能く話し込めば釋らない人でもありませんから其處は私が中へ入つて何とか爲るですから……』

『難有うございます、妾人様に其様な者と思はれますかと思ふと、本統に口惜しうございます……』

『御尤もです』  
『三田村さん貴方ですから何も斯も包まず申し上げますが、何うぞ貴方のお心で、妾が潔白であるか無いか、御判斷を願ひます』

『宜しいとも、私は貴方の味方です』  
『成程、爾ういふ噂があると仰しやれば、全く跡方もないと申し切る事は出来ません』

『え、何です？、跡影もないといふ事は出来ない、ぢや奥様、貴女に其様な覺えがあるのですか』



與四郎は房子の返答の意外なのに驚いた屹と何とか辯解するであらうと豫期してゐたのに其れが斯う綺麗に跡影もないとは云はれぬといふ、寧ろ房子の大膽に驚いた。

『はい、全く噂の通り、斯うして居ります中に男は始終出入りして居りました』

『ふむ……、それで……』

『しかし三田村さん、是れには長いお話しやら深い由緒があるのです、所天が恚歴に私を置き去り同様に致しましたのも、一つは其様な事が原因の一つに成つてゐるやしないかとも思ひますので』

『なる程』

(二十八) 天來の福音

川の水の上には必らず泉がある、煙が昇れば其下には必と火がある

る、是れは争ふことの出来ぬ眞理で、房子は恚歴忌はしい疑ひを他から受けるにも、房子自身が云ふやうに疑はれるだけの事實は確乎にあつた。

それは他でもない曾ては房子の意中の人であつた塚田時雄が、清造が家出してからも時々房子を訪問して、友人として房子の墓のない境遇に深い同情を寄せてゐたが、今年の春に成つてから時雄の足は愈々繁しくなつて、三日にあげず堀川家の戸口を潜つた、寂しく心細く暮してゐる房子は、時雄の來て呉れるのが厭ではなかつた、事ある時には相談相手にも成る人と頼母しくも思つた、しかし、時雄が去年實家の母に云つたといふ言葉もあるので、房子は時雄と對座する時には何時も充分の警戒はしてゐた、時雄の方では房子の態度が自分の豫期したやうでないので、流石に心がちれたものか、一日遂に自分の意中を打明け

て房子を説いた、詰り其言葉は、百年の苦樂を俱にせうといふ



妻を妻とも思はず、恚に家財道具までも持出して家を願ひぬ  
 浮薄な所天を宛に、何の見込みがあつて恚ういふ慕ない生活を  
 してゐられるのか、自分はその解に苦しまねばならぬ、恚に  
 とに成るのも、一つは貴女が不用意の結婚をしたからである、  
 古い慣習に囚へられて、互ひに心も知り合はぬ同士が、唯一回  
 の會見で長い運命を犠牲にして、了つたと云つても可い、恚うし  
 てゐては貴女の前途は實に寒心に堪へぬ、それよりも今の中に  
 断然意を決して此家を去つて了ひ、而して久しい間心を知り合  
 つた自分と改めて結婚して下さい！  
 此方の弱點に乗じたといふでもなからうが、時雄は斯ういふ風  
 に房子を説いたのだ、けれども房子は其れを勿付けて、  
 『塚田さん、貴方のお思召しは難有うございますけれど妾が  
 恚うして居りますのは、人様から御覽に成つて何う見えます  
 かは存じませんが、妾には妾の信念がありますので、貴方の

お言葉に従ふことは出来ません、何うぞ爾ういふ事は再び仰  
 しやらないやうに願ひます、而して恚に女ばかりの家へ屢  
 々お越し下さいますと、世間で悪い風評を立てないにも限り  
 ませんから、所天が歸つて参りますまでは何うぞ是れ切りお  
 出で下さいませせんやうに願ひ致します！』と、立派に断つ  
 たのは、つい此の四五日前の事であつた。  
 潔白な房子は此の事實を聊かも包まず與四郎に話した、  
 『恚ういふ譯で其様な噂も立つたのでせうから、妾は自分の心  
 の汚れてゐないのだけに満足して、他から何と云はれまして  
 も詮方がないものと諦めます』と、房子はほろりとして頭垂  
 れた。  
 『いや分りました、其れを聞いて僕も安心しました』と與四郎  
 は房子の堅固な心に感じて、  
 『最う是れで何も云ふ處はありません、たとひ箆笥町が何と云



はうが、この三田村が貴女の御一身上には立派な裏書を致し  
ます。而して何です私にも大いに考へる處がありますから、  
何うでせう貴女と堀川君との間の事は、私にお任し下さいま  
せんか」

「難有うございます、何分宜しいやうに……」

「ふむ御承知下さいましたか、難有い、實は何です」と、與四  
郎は莞爾笑つて、

「堀川君も此頃では大分先非を悔悟してゐるやうです、あの妾  
のお龍と同棲して見ると、彼奴實に箸にも棒にもかゝらない  
不取締な女で、堀川君も呆れて今では愛想を盡かしてゐるの  
です、だから此方へ歸りたいと思ふ意志もあるんだが、那麽  
酷い事をしたので、貴女の意向を測り兼ねて躊躇してゐる模様  
です、何うでせう奥様若し堀川君が先非を詫びて歸つて來る  
と云つたら、貴女に御異存はありませんか」

天來の福音！、房子は自分の耳の聴き違ひではないかと思つた

(二十九) 心から

こゝ四五日前から東京の天地は著るしく陽氣に成つた、今朝の  
新聞には上野の彼岸櫻が満開だと出てゐた、華美な流行を追ふ  
た着物を着て、電車に乗つたり降りたりする男女を見ると、春  
だナ、といふ楽しい感じが誰の心にも起つた。

この楽しい春に、獨り堀川清造は自ら求めた禍ひとは云ひなが  
ら、毎日常不愉快な日を送つてゐた、快樂主義の渠は何うしても  
其快樂を心から味ふ事が出来なかつた、秋の雜司ヶ谷の詩的な  
眺めであると同じく、春の雜司ヶ谷も晴れ晴れとして風情に富  
んでゐたが清造は何うしても其方に足が向かなかつた今日で最  
う五日といふもの、其れから其れへと酔を買ふて歩き廻つてゐ  
た。



「あゝ詰らない、何だつて那樣な奴を信じたのだらう、女としての價值なら三文もない、家政を整理するといふ觀念のない其日暮しの放浪者のやうな性格の女を何うして信用したんだらう、莫迦々々しい」

江戸川の電車の終點で降りた清造は、恚麼ことを思ひながら春の夕陽を浴びつゝ田舎の驛場めいた長い醜い音羽の町を護國寺の方へ歩いてゐた。

昨日今日の清造は、お龍のだらしなさに全然愛想を盡かして、自分の住居と極めた家へさへ、放埒なお龍の姿を見るのが厭さに、歸らうと云ふ氣は仕なかつたのであるが、斯うして何時までも歸らなければ、其留守の間に龍が甚麼ことを仕まいにも限らぬといふ疑念も起つて、今日は奮發して歸らうとする處なのである。

護國寺の石段を上つて、正面の如意輪觀音堂の横を清造は裏の

墓地へと出た、墓地の櫻は大分蕾が含らんでゐた、けれども清造には其れさへ眼に入らなかつた、片手に洋杖を抱へるやうに脇挟んで、片手をズボン隠しへ突込み、下を向きながらコツコツ歩いてゐた。

斯うして歩いてゐる中にも、清造は依然としてお龍や秋山の事を考へてゐた、而して自分は今まで秋山やお龍に欺されてゐたのではないからうかと思つた、近頃お龍と秋山の容子が自分の眼に不思議に映づるのは、全然自分の嫉妬ばかりではないやうな氣がした、

「あゝ僕が悪かつた、これに較べると房子は實に見上げたものだ」

と前後に人蔭が見えなかつたので、清造は思はず呟いたが、空中に人あつて其聲を嘲笑ふやうな氣がした。

恚麼煩悶をしながら、夢のやうに歩いてゐた清造は程なく鬼子母神裏の家へ歸り着いた、久しく掃除もせぬものと見えて、杉



垣の下には塵が埋高く、門は鎖されて宛がら空家のやうであつた。

「畜生、また何處か出やがつたナ、怪しからん奴だ」

清造は高い舌鼓をして門の戸を押した、別に縮りもしてなかつ

たと見えて、門は難なく開いた、ツカ〜と庭口から内へ入つ

た清造は、引寄せてある縁の雨戸を外から残らず開いた、

「恠麼用心の悪い事をして出やがるんだ、實に始末におへない

奴だ！」と清造は靴を脱いで檻り〜座敷へ上つたが何に驚

いたのか、渠はあつと叫んで立竦んだ。

(三十) 芽出度い團圓

ごーん、ごーん、と長い餘音を引いた入相の鐘が春の空気に漂

ふて、夕暮の色が舞々と鬼神母神の森に追つた時、何となく歡

樂の悲哀といふやうな感じを覚えるのであつた、いや、今の清

造は其様な情味を味ふ餘裕はなかつた、薄暗い座敷の真中に仁  
王立に立つて、右を眺め左を睨み、虹のやうな大息を吐いてゐ

た。

戸鎖りさへ碌々せず、例の投ッ放してお龍が外出をした跡へ、

大吉利市とばかりに泥棒でも入つたのか、箆筒の抽斗しは残ら

ず開放されてゐた、押入の中も空虚で、床の間の裝飾時計もな

い洋服もない、三棹の箆筒は盡く殻に成つて、幾個の柳行李や

支那靴も見えなかつた、其他家中の目星い道具は羽でも生へて

飛んで行たのか、影も形もなかつた。

清造はドカと座つて又四邊を見た、

「何だか訝しいぞ、眞逆晝日中に泥棒だつて恠麼に持つてきや

しまい」

腕を組んで少時考へ込んでゐた渠は、つい眼先の机の上に一封

の書狀の置いてあるのを發見した、若や！、といふ疑念が稻妻



のやうに閃いて、手早く其れを取上げて見た、

御禮かたぐ、一筆申残し候、長い間お世話に成り、御恩のほどは長く相忘れ申さず候へども、近頃は又々御本宅懐かしくお成りなされ候と見え頓とお歸りも御座なきは、最早や私事には御用なきものと存じ候まゝ、お留守中ながら、御暇致候私の衣裳其他この家の一切の物は、元々私のために御用立て被下候ものなれば無遠慮ながら残らず頂戴致しまる候、憚りながら御本宅の奥様へも宜しくお傳へ被下度先は急ぎ是れのみ申上る、賀祝

と走り書にお龍の筆跡でかゝれてゐた、清造は呆れと驚きに凝乎と其手紙を睨んでゐた。

庭口から聲が聞えて入つて来たものがあつた、  
「何だ未だ火を點けないのか、何うしたんだね、はゝはゝ」

「堀川君、居るかいい」

清造は其聲で早くも三田村與四郎だと覺つて、  
「おう三田村か、好い處へ来て呉れたまあ烏渡是を見て呉れ、早く」

「何だ急込んで、何か事があつたかね」

と、與四郎は笑ひながら上へ上つて、清造の差出す書面を受取つて、未だ暮れ切らぬ薄明りに透して見た、

「ふむ、酷烈な事をやりやがつたな、これには必と相棒があるね」

「むゝ僕も爾う思ふのだ」

「だから云はない事ぢやない恁麼事に成るから、僕ア豫て君に忠告してゐたのだ」

「一言もない、實に面目ない……」

「最う目が覺めたらう」

「眼は疾くから覺てたんだが、躊躇してゐたよめに先んじられ



て了つたんだ」

「しかし濟んだ事は詮方がない、眞逆其筋へ訴へる事も出来まい、君の名譽に關する事だから」

「む」

「けれども斯う成つたのを寧ろ僕は祝する、何うだ堀川、昨日僕が會社で話した一件、君の考へは何うだ、此機會を利用して、水川町へ歸つたら何うだね」

「さあ……、僕も其れは望む處だが、何分僕の今までの罪惡が身を責めておめく、妻に合す顔がないので……」

「そりや可かんよ」と與四郎は屹と成つて、

「昨日も話した通り、君の妻君は普通の婦人ぢやない、眞節無比だ、少しも君を怨んでは居られん、一日も早く君の歸宅するのを希望してゐられた、斯ういつては失敬だが、只君が今までの非を本心から悔悟して、是れから先圓滿な家庭をつく

りさへすれば妻君は何處までも忠實な君の家の主婦だ」

「爾う云はれると愈々恥入るばかりだ」

と清造は去年の九月に家を出た時の自分の非行を思ひ出して、

甚麽東西にか責められるやうな氣がして、悄然と頭を垂れた。

何れも恥入る事はない、君が爾ういふ心なら丁度幸ひだ、實は今

夕君を此處から呼出して妻君との間を解決させやうと思つて、

妻君を連れて來たんだ」

「妻を？、房子を！」

「む、表に待つて貰つてゐるんだ、待ち給へ、今呼んで來るから、何しろ斯う暗くつちや可けない、洋燈に火を照けとき

給へ」

與四郎は身輕に庭へ降りて杉垣の外へ出たかと思ふと、清造が慌てゝランプに火を點した時、

「さあ奥さんお入りなさい、何も遠慮する事はないです、此處



も貴女の家同様です』といふ與四郎の後ろから、房子はふく  
よかな臨月近い帯の邊りを袖で隠して、慎ましやかに入つて來  
た。

『おゝ旦那様ッ！』

房子は清造の姿を見ると前後を忘れて駈寄つた、

『おゝ房さん、僕が悪かつた、宥して呉れ、僕は先非を後悔し  
てゐるんだ』

夫婦は思はず手と手を取合ふた。

そよ／＼と吹く春の夕風につれて、何處からともなく、梅ヶ香  
が匂ふて來た。

家 後篇 (終)

説小 武士道の華

稻岡奴之助著

(其一) 殿下の御仁心

尾張國中村の士民より身を起して、龍の雲にのり虎の風を衝い  
てゆくがごとく忽ち日本六十餘州を席捲し、山崎天王山の戦、  
大徳寺の焼香、さては江州賤ヶ岳の快戦に、群雄の肝を寒から  
しめ、今伏見桃山の城に寛々たる稀代の英雄、豊臣太閤殿下の文  
祿年中、朝鮮征伐の催しにて諸國の大少名より兵を出し此役に  
赴く中に瀬川采女として知行僅に二三千石を領する武士あり、淺  
野左京大夫幸長(彈正少弼長政の子)の手に屬して戦地に向ひ



けるが、采女出陣すべき三十日程前に何某の女を娶つて偕老の契り浅からざりしに、公役なれば是非もなく、最愛の妻を振残し後髪ひかる心地にて異國にむかひぬ、戦士の家族が折節陣中へ書面の便りするは今も昔も異ならず、固より陣中への状なれば、状の役人ありて一々検めたる上、當人に届くるが當時の軍規にて、中にも直參の人の状は太閤殿下の御前にて披見あり、其中に采女の妻が所天におくる文あり、山鳥の尾の長々と書列ねたる水莖の跡あはれに優しく、夫婦の情のさても濃かなる、嫁ぎし日數間もなく、天涯萬里と懸隔たり會ふは別れの初めとなつて、敵に向はれど、戰場のならひ、武士たる者が一たび弓矢を執はれと思すべからず、忠の爲には家も懐かしと思ひ給ふな、文辭の上、賢貞の志深く見る人聞くもの感せざるはなかりし、殿下は其志の深く情の厚く、所天に義を勸むる女の心のあはれ

と聞給ひ、采女事は外用生じたり、疾々歸朝致さすべしとて、左京大夫方へ申渡され、當人采女へも御詮あり、采女このことを聞き、妻の文通ゆゑ呼戻さるゝこと恥かし、一旦は歸朝せまじとは思ひけれど、外御用と聞きては主命もたすべくもあらず、遂に朝鮮表よりしたゝめて歸朝したり、斯れば上下のもの皆殿下の仁心厚きに感じ、寄れば必ず詰合ひけるに、談話は忽ち此其後伏見の城に諸大名の家來多く詰合ひけるに、談話は忽ち此噂となりて種々に讒辭を并ぶる中に、當時濃州山口にて一萬石を領する古田織部正吉勝の家士にて馬場御酒之丞と呼ばるゝ武士あり、身の丈高く骨格たくましく、面がまちも嚴めしげに、戦國武士として天晴れ一かどの役に立つべき者と見えしが、取別け殿下の仁徳を賞讃し、「さて聞くだに涙のこぼるゝ程でおじやる、采女の妻の貞節等にもホト感に入りまいたが、別けて殿下の御仁心、其妻の志を哀れと涙み給ふて、態々采女



を戰場より呼戻いて、夫婦の契りを全うせしめ給ひし御仁心、  
 流石は天下取の大度量、斯うなうては成り申さぬ、總てが斯う  
 でおじやるで、誰もかれも殿下の御爲には命いらぬと申すでナ  
 渠は感嘆肝に銘せしと見えて、そのいかつげなる面をしかめ、  
 大の兩眼に一滴の露さへきらめきぬ。  
 今まで黙然として聞きわたるは、渠よりは遙に小兵なる、黒面  
 隆準の若者なりしが、何思ひてや、此時大口開いてカラく、と  
 笑ひぬ、不意の笑聲に一同は驚き、等しく渠が方に陣を聚めて  
 何者と見れば、是は當時數ある大小名の中にも、東北の雄鎮と  
 して恐を懐かれし蒲生飛彈守氏郷(此時會津百二十萬石)の家  
 來にて、西村佐助と呼ばるゝ男なり、  
 『何が可笑しうてお笑ひやる』  
 『我ら談話に身が入つて何事にも心付き申さぬ、何事でおじや  
 るの』

『何事でおじやる』  
 『何かおじやつたか』  
 人々は口々に問ひぬ、問はれて西村佐助は多くもあらぬ頷の髯  
 を撫でつゝ、  
 『はゝゝゝ、何事もおじやらぬ、が、餘りに可笑しうおじやつ  
 たで、失笑のしまいた、自體人の顔が十人寄れば色々様々に  
 異なること、心も大小廣狭いろく、に異なるかと思へば可笑しう  
 おじやる、といふは、馬場氏の今のお言じや、御主人織部正  
 殿御小身故、御家來の馬場氏までが借も氣の小さき事でおじ  
 やる、總じて天下の主の仁徳といふは斯様に些細な事ではお  
 じやらぬ、是は只、殿下が一時不便と思召したまゝ仰出され  
 たまで、仁とは左様に狭い意義ではおじやらぬ、さるを、  
 是等を御仁徳と心得らるゝのみか天下取のなんのと申さるゝ  
 は、はゝゝゝ小家に仕ふる御仁には相應かは知らねど、我ら  
 五



六  
 の目からは何しうおじやるテ、聞けば織部正は茶の湯の名人とやら、室町家の古實など覚え、其れで漸く壹萬石ばかりの知行サ戴いておゐる御仁、いざ戰場といふときには、茶釜や茶杓で戦は出来申さぬ、家來の馬場氏が斯様に申さるれば自然兵部少輔殿御心まで知られて、はゞ我らが主君とは雲泥萬里、申さばお氣の毒のやうな心がしますソ、其れしやでツイ笑ひました、各位も無可笑しうおじやらう』  
 傍若無人といはむか、無禮至極といはむか、餘りとしても怪しかる言に、列座の人々は手に汗握り、馬場御酒之丞若し怒つて争論にも及ばい、事の外なる椿事の起らむと安き心もなきは、互ひに見合す顔にて早くも其れと露れぬ。  
 されど馬場御酒之丞、物慣れたる勇士とて、一時は面色かつと變するまでに腹立ちけれど、忽ち殿中なれば此處で怒つて事を起しては主の不爲と思直し、じつと胸を鎮めて片頬に微笑を含

七  
 みしのみ。  
 西村は尙も飽き足らでや、  
 『なんと各位、お互ひに大身の家に仕ふる身は、斯程の小事には氣もとまり申さぬ、我らが主君は』  
 ユラり膝のり出し、  
 『奥州會津に於て』  
 自慢の小鼻ピコつかせながら説出さむとする時、  
 『飛彈守様お立ち一ッ！』  
 殿中に轟きわたる聲に、渠は驚いて立上りぬ。  
 (其二) 當座の褒美  
 さらぬも寂しき秋の夜の宵より小雨そぼふりて、縹緖させとぞ鳴く蟲の音も聞えず、半ば枯葉となりし芭蕉の葉に折々サラサラと音あるのみ、物色殊に静かなる古田織部正吉勝が宿所の奥



の間、茶に通ふ小姓の女も遠ざけ、主従只三人最と肅かに語らひぬ。

主なる織部正は年の頃三十四五。色白の細面に絶えず微笑を含める優しき、身の丈のさして高からざる、五體の肉柔かげなる見るからに戦國武士には似合しからず、實にや武よりは文、勇

よりは智、茶道を以て君に仕ふる人とは知られつ。織部は脇息に片肱もたせ、片手を火桶に翳して、馬場御酒之丞が言をつくぐ聞きむたりしが、談の切るゝと共にハタと膝を叩いて、

「む、天晴れぞ御酒之丞、流石は汝、能うした、のう理介」

「はッ御意に候」

謹んでお受けせし理介と呼ばれし男は、主の織部よりは一入の美男、年も十ばかり若く、顔は稍丸き方なれど色は越路の雪か

と見んばかり、髪黒く肉肥え、いかつけなる面貌のうちにも何處やら匂ふ花の色香、身には質素なる衣着たれど、短髭の光に映じて、織部よりも御酒之丞よりも更に一段の光彩を放ちぬ。

主に褒められて御酒之丞は額を撫でながら、

「恐入りまする、彼の西村佐助め、己が主の大身なるを頼みに

御主人の御上までも悪しきまに嘲けりまいたれど、外ならぬ

殿中、怒りに任いて刃傷にも及び候ふては、事の譯も知れず

御前の御名も出で候ふてはと、じつと胸サ押へて退出の致し

まいた」

渠は尙怒りの烟火の胸に燃ゆると見えて、眼は稍血走り、さらぬも恐ろしげなる武者面一入武張つて、思入つたる體、

「されば今宵、只今より、某西村佐助が許サ罷越して、尋常の

勝負に及びます存念、今日までの御恩をも報じませず、勝

手がましき振舞恐入りますれど、武士の意地、兩刀の手前、

弓矢とる身の此まゝには捨て難きことにおじやれば、萬づは



寛仁大度のお思召しもて宥されて、固より私一分の意趣にて

はなく候へば』

思入つたる渠が顔を、瞬きもせず、肥と瞻入りし美男の理介、白き面色に紅を潮し、ぶるくくと武者震ひするは只とも見えず。織部は首を左右に掉りて、

『汝の云ふ處悉く理はある、なれども、先づ小事じや、今日殿中にての大人しい致方を其まゝに、彼と刃傷などは思ひ止まれ、たとひ汝が他所にて腰抜といはるゝとも、また我らを腑甲斐なしと云はうとも、我らには我らの思案あり、汝は我らの馬の先にて手柄さへ致しくるれば可い、其れこそ天晴れの勇士なれ、のう理介』

理介はハツと畏まりしのみ、

『一朝の怒りに身を果す匹夫の勇、今日殿中にて汝が落着いたる取なし感じ入る、當座の褒美とらせう』

織部はバタ／＼と手を鳴らしぬ、聲に應じて出来る小性の者を見て、

『前に申付けしもの、是なる御酒之丞にとらせよ、疾うせい』心得て迂り出でし小性の者は聽て程なく再び入り來りぬ、見れば廣蓋に載せられたる時服三つ、白銀二十枚を恭しく主の傍近く差置きて引退りぬ、

『心ばかりの褒美ぞ、此のちの忠勤たのむ』

御酒之丞はハツと平伏し、只感涙に咽ぶのみ、座は暫し聲なく戶外には雨の音稍はげしく聞えつ。

(其三) 武士道の意地

この理介と呼ばれし武士は、元の姓を來島と稱し、大友因幡守家中より出でし者なるが、後古田織部正に仕へて庄林と改姓し、専ら忠勤をぞ勵みける。



理介生れて美貌衆に優れ、織部正の家來數ある中に第一の美男  
と呼ばれ、蓮葉なる女などは渠と路傍の行會にもさつと頬を赤  
むる程なれば、理介が名は忽ち奥に聞えて、笑止や未だ見ぬ戀  
にあこがるゝ女中もあり、さては一年只一度の奥表打混りての  
觀櫻の宴に渠を見るを身の樂みとするものあり。  
されど渠は其姿の女にせまほしき程優しきには似ず、性來餘り  
に直に過ぎて自ら信ずること厚く一たび我心に斯うと思へば、  
主なる織部は思か、誰が何んといふても斯といふても八幡耳に  
は入れず、堅く己が初心を執つて動かざること盤石の如くなれ  
ば、人皆な呆れて眉を蹙むれど、織部は深く渠の一本調子と忠  
義深きを愛し、普代恩願の家來を差置きても渠を重用し、拔ん  
で人物頭とはなしけり  
高木は風に折らるゝ習ひ、家中の嫉妬は渠が身一つに雨霞と降  
り來るかと思へば、不思議や、渠は頑固者として持て餘さるゝ

と共に、萬づに罪なく愛嬌者として持て離されぬ、其眼元のし  
ほらしげなる、其口元の武張つたる中に何とやら優しきある、  
是ぞ渠が徳なり、否、心の素直なるを現はしむるなり。  
されば理介、今宵主君の御前にて御酒之丞より、蒲生の家來西  
村佐助が無禮の言葉ありしと聞き、己が屋敷へ歸る途中にて熟  
々思ふやう、今日の御酒之丞の落ちつきたる仕方は感じ入つた  
る事なり、されど其西村佐助といふ奴、何奴なれば己が主の大  
身なるを笠に着て、我らの主をまで罵りしぞ、飛騨守が武士な  
らば我らが主君も武士なり、佐助が武士ならば御酒之丞も武士  
なり、大身小身を問はず、武士たるに於て些の異りもなきもの  
を、小身の家の家來なるが故に大身の家の家來に罵られて黙する理  
やある、大身の家の家來の身には小身の家の家來の刀は立つものか立た  
ぬものか、今に試しくれむ、と渠は日比の一本調子に思ひ詰  
て、家に歸りて後も鬱々として樂しまず。



天は理助が武士道を立てさせむ爲の好き機会を與へぬ、太閤殿  
 下の大政所御不例により殿下は西國より暫し御歸京あり其後日  
 を經て大政所の病氣も稍怠り殿下には大佛妙法院へ參詣あり。  
 當日一の門を固むる役目は蒲生飛騨守、即ち其番頭の西村佐助  
 人数引連れて警固し、二の門の固めは古田織部正、其番頭は庄  
 林理助なりけり。  
 殿下は程なく參詣を終り給ひ、二の門より歸城あり、されど一  
 の門に其の様子篤と知れかねたれば、西村佐助は家來一兩人を  
 從へ、庄林理助が固めたる二の門へ來りていふ、  
 『これは蒲生飛騨守家來西村佐助にて候、殿下には疾う此門よ  
 り御歸城相濟みたと聞きまいたれど、御様子篤と知れかねま  
 するで、承り度うおじやる』  
 此方の理助は、斯くと取次ぐ家來の言葉を開きが否や、只見る、  
 面上にさつと紅を流し、キリ／＼と眦をつり上げ、思はずブル

ブルと武者震ゐして、  
 『飛騨守家來西村佐助が參つた、むゝ時節到來、いで／＼』  
 渠は佩いたる太刀の目釘をしめつ、  
 『其答某自らせう』  
 とツカ／＼とばかり、例の色白小兵の五體を大やうに動かさせ、  
 張肱、大股に進出で、  
 『これは飛騨守御家來西村佐助殿おじやるよ、某は小身者古田  
 織部家來庄林理助に候ふわ、お見知りやれ、さて、氏郷公に  
 は御大身に定めて人数も大勢でおじやらう、されば所々に  
 人数は配られて、殿下御歸城の御路筋まで疾う知らるゝ筈、  
 其れを御存じなうて、我らに御問合せあらう程では、すわ御  
 大事といふ時には忽ち腰抜になられ、上の御役には立ち申す  
 まい、日比から大身自慢の御分等まで倍々不念、笑止でおじ  
 やるわ』



と罵りざまカラ〜と笑ふたり。

これを聞きたる西村佐助、我にもあらず赫と怒りて、濁みたる

太き聲を頼はし、

「ヤア古今無双の無禮ぞ、御分何の意恨あれば、口先にて人を

怒らせ斯くはいふぞ、西村佐助御分風情の慰みにはなりに來

ぬ、今一度申し見よ」

と太刀をひねくる、

「おう何遍でも申さうぞ、御分にも口先にて罵らるを腹立つこ

とお知りやるか、先頃我ら朋輩へ御分何とお云やつた、主人

織部正までを小身者と嘲られつらう」

とチリ、〜と詰寄りぬ。

借は先頃殿中にて自分の御酒之丞にいひし事を根に持ち、この

理助我に喧嘩をしかくるか、折悪しと佐助は稍尻込みの色なり。

理助は曇みかけて、

「返答おじやるか、其節に殿中なれば御酒之丞も辛抱して參つ

たなれども、今日は殿中でおじやらぬ、大身の御家來の身に

は小身者の刀は立つか立たぬか、武士道の意地、お試しあれ

ッ」

叫びざま腰を捻りしよと見れば、渠が手には明晃々たる秋水の

閃めき、佐助は肩先大袈裟に斬られて撞と倒れぬ、此間髪を容

るゝの隙なし。

これを見て佐助の家來一人、身を翻へして一の門へ注進に駈付

け、残りし一兩人

「やッ斬つたナ」

「大傷サ及んだナ、主人の仇」

とズラリと拔連れてエイ〜聲して斬込んだり、

「狼藉ぞ」

「討取れ〜」



聲々に呼ばりながら、理助方の足輕共むらくと渠等を追取りこむる處へ一の門より駈け来る佐助方の同勢、こゝに双方入り亂れて閃めく太刀は暗夜の稲妻、流るゝ血汐は龍田の流にこの中に理助は手早く血刀拭ひて鞘に納め、混雑に紛れて足早に立退きぬ。

(其四) 久世三四郎

「さて、御分は見上げた男ぢや、某かくてある上は、蒲生は思か、殿下でも、弓矢八幡其許を渡すことではない」  
斯くいふてニコリと打笑みしは、年頃三十三の、色の白い、顔の長い、額の廣い、耳朶の大なる、眼中の涼しい、一見一かどの士大将と見ゆる大男、厚き髪の毛を眼のつり上らんばかりに後ろへ引締め束ねて太元結もてクルクル巻付けたる、袴の短き衣服着て、小刀を帯挟み、袴の上にあぐらと座して客の方をデロ

デロ、  
是は當時海道一の名將と聞えて、太閤殿下も席を譲つて語り給ふてふ徳川家康の家來、旗本の武士中にも別けて股肱と頼まるる久世三四郎

「はッ難有き御意、某肝に銘じて忘れませぬ、大切なる御使の御道筋を遮りましたる罪も問はれず、武士の情け、某を御かくまひ下し置かれる段、御恩は生々世々」

と一禮するは物ごしにも人目にソレと知らるゝ、今日大佛二の門にて飛彈守家來西村佐助を討取つたる、庄林理助なり。

理助は佐助を刃傷に及んで立去る折しも、徳川家にては殿下の御歸城を祝するため、其臣久世三四郎を使者として、淺野彈正が方まで遣はしたるに、行會ひ、其行列を見て、是は好き人に出會たり、聞及ぶ徳川殿は無双の仁君とやら、また久世殿は殊に義俠ある御仁とやら、西村佐助風情を斬つて其まゝ相果てんも



殘念至極、武士の最後は戦場のこと、時節を待つて君の御馬前に  
に華々しき討死を遂げんまでは一時身を隠すにあり、其れには  
此仁を頼んでと、忽ち思案を定めて久世が伴先へ廻り其れなる  
は徳川家の久世殿と見上げました、これは古田織部家來庄林理  
助と申す者にて、只今遺恨の筋あつて蒲生家の家來西村佐助と  
いふ者を討取り立退き候、何卒おかくまひ下され」とあるにぞ、  
三四郎聞きも敢へず、「易き事なり、心安く思はして某が供の内  
居られ候へ、たとひ氏郷自身に參らうとも、某が目の黒き中は  
御分を渡しは申さぬ」と、こゝに理助は久世が供廻りに混じ、  
斯くは久世の屋敷へ伴はれしなり。  
久世は幾度か打領きて、  
「お言葉身にとつて痛み入ります、さあ御手上げられい、御分  
も武士、某も武士、互ひに高下はおじやらぬ、今も申す通り  
武士の意地サ立てられし御分をかくまふ某の譽、たとへば殿

下の御聲が、りにもあれ、主にて候ふ家康殿が命にもあれ、  
三四郎佩いたる太刀、着たる鎧、まツた弓矢神に誓うて屹と  
御分をかくまひ申して見せう」  
渠は膝につかへし手先に力を入れて、斯く立派に誓ひの言葉を  
つがえて、猶も理助の人物をデロく、  
徳川家が來多き中にも、智者と呼ばれし久世三四郎、早く  
も理助が人と成りを盡く見終り、成程この男、小身者と主を罵  
られしを遺恨に思ひ、小身者の刀が大身の身に立つか立たぬか  
を試しう程の正直者なり、たとへばこの男の性は白き糸の未だ  
何色にも染めざるが如し、大したる役には立つまじきも、心直  
ぐなれば追付け物の用にも立たむ、織部正は好き家來を持たれ  
た、斯る又と得がたき人物を、僅かばかりの刃傷沙汰より暗々  
亡はんは惜しきものなり、金輪奈落盡しやらすば第一の家名折な  
人に頼まれたる上は、



り、と決心したり。  
 斯ることは當時の世には多くある慣ひなれど、別けて這の三四  
 郎に於ては人一倍に義に勇むの癖あり、理助がためには、正に  
 浮ばぬ亡者が彌陀本願の俱誓の船に救ひ上げられし其れにも増  
 しけり。  
 『お見やる通り、屋敷は誰にも氣のおける者はおちやらぬ、さ  
 れば御分の家に居られうごと、氣儘に、心置きなう、この一  
 坪の着くまでは何時までも逗留せられよ、また、時と品によ  
 り、遠國の大名に仕官の望みもおちやらば肝煮り申さうわ』  
 といふ三四郎の言葉を、理助は片手を上げて遮りぬ。  
 『あいや久世殿、恐れながら其儀ばかりは御配慮御無用でおち  
 やる、たとひ何麼なる事のあらうづるも、理助めは、古田織  
 部の外には主は持ちませぬ、たゞ、西村佐助ごときを斬つて  
 主が馬前に討死する大事の身をやみく殺すも無念と存じま

して、御分御袖に纏りましたる次第』  
 と渠は他家へ肝煮らんと云はれしを稍不満の色なり。  
 これも久世が當座の機轉にて理助を試し見しなり、試されし理  
 助の喜ばざる色あるを見て、三四郎は愈々其人物を見上げ、い  
 よいよ身にかへて渠をかくまひ了せんとは思ひぬ。  
 やがて命じたる酒肴も處狭きまで運ばれ、主客は舊き友の如く  
 酌始めぬ。  
 折しも當家の家來一人惶惶しく闕の外へ手を支へて、  
 『はッ申上げます』  
 久世は持ちし杯を差置き、眉を皺めて、  
 『何事ぢや』  
 『只今、蒲生飛驒守様御家來印南兵部と申す御仁お越しあつて  
 主用にて主君に直々御意得たいと申されます』  
 理助はハツと色を變じて主人が様子を窺ひぬ、三四郎は事もな



げに、

「最う来たか、餘りに早いやうぢや、よし／＼逢ふてとらさう  
其使者を書院ヲ通せ、こりや／＼粗略ないやう取計らへ」

心得て引下る侍の後姿を見送り、理助は膝を進めて、

「某が事より、若し事大切の儀ともなりませれば、御分應かし  
御迷惑の儀と、理助め恐縮の他はござりませぬ」

皆まで云はせず三四郎は其長き顔を心地よげに皺めてカラ／＼

と笑ひ、

「氏郷自身で来うもビクともせぬ三四郎、其家來が千人萬人參  
らうとも、一言の下に追返して見ませうわは／＼」

この快調なる主人が言葉を聞きて、理助は思はず感謝の涙に暮  
れぬ。

(其五) 氏郷ノ腹立

蒲生飛彈守よりの使者の來意といふは他ならず、最う来たかと  
久世が笑ひし如く、庄林理助が心元なく思ひし如く、全く庄林  
引渡しの談判なりき。

使者の印南兵部は扇子を笏に、主人氏郷の意を傳へていふ、

「拙者家來西村佐助といふ者を、古田織部家來庄林理助といふ  
者が討取り、其場を立退き、其許の御馬前サ駈込みましたと

其許には其まゝ供廻りへ御加へあり、當屋敷サ御連あつたと  
確に承知しました、一旦の義は御尤もおざれど、此上は理助

を此方へ御渡し下され、某受取つて參らむと、主命に依つて  
推參のしまいた」

聞くより久世三四郎は襟を正して、

「成程御尤もの仰せ、委細承知しました、なれども、其理助と  
申す者、一旦の義を以てかくまひ候はんと、先刻屋敷サ伴ひ

ましたれど、彼は某に迷惑のかくるは氣の毒なりと申して、



止むるをも聞入れませず、今しがた當家を立退きまいたる處、  
 今半刻も疾う御入來あらば、仰せに従ひませうものを、斯様の  
 の次第にて、残念ながら某屋敷には居り申さぬ、他處をお尋  
 ねやれ』  
 と事もなげに云ひ退けぬ。  
 尤も、蒲生家にて久世の屋敷へ使者を立てる迄には重役に於て  
 種々の評議あり、相手は音に聞ゆる久世三四郎なれば、一筋二  
 筋にてはライソレト渡すまじ、なれども渡さぬとて受取らで止  
 むべきならず、庄林理助は西村佐助の當の敵なれば、是非に  
 ても屋敷へ連歸り、佐助が爲に仇を討たでは、第一蒲生家の名  
 折、第二君が臣を憐れむ仁心の程を一藩に認められず、渡さず  
 は又その後の計略はあり、何は兎まれ、物は當つて碎けよ、久  
 世の方へ人を遣し見むと、こゝに評議は一決して、其日の火點  
 し頃、この印南兵部を使者として差向けしなり。

果せる哉、久世が答は此方の豫想に違はず、空嘯いて平然たる  
 有様に、兵部も強てとも云ひ難く、二三押問答の末、其日は兵  
 部些の要領をも得ずして引取りけり。  
 兵部が復命を開たる氏郷の腹立大方ならず『おのれ憎き久世が  
 振舞かな、奥州の豪傑蒲生氏郷を人らしうも思はぬと見えたり  
 さらば予に所存こそあれ』と沸然として起上り『誰ぞある馬曳  
 け』とは、是より自ら徳川家へ至り、直々家康に面じて一談判  
 を試んとはするなり、事は愈々大袈裟にぞなりける。

(其六) 會津百二十萬石

『さても飛彈守には能う入らせられた、過急の御用とやら、甚  
 麼でおじやるの、先づ承はつて、さてゆるくと酌交し申さ  
 う』  
 莞爾に笑みながら、丸く皺多く色艶美しき顔に、無限の優しみ



を見せて、仲好き兄弟と語るが如く、竹馬の友と相向ひたるが  
 如く、露ばかりの隔もなく、相對する客に向ひて斯くいひしは  
 誰あらず、當時太閤殿下を除いては此仁の前には誰あつて頭を  
 上ぐるものなき、海道一の名將徳川家康なり。  
 客は奥州會津百二十萬石の主人、身の丈高く骨格たくましく、  
 太き眼、高き鼻、一文字に結びし口、鼻下に生ひたる黒き髯、  
 いづれか其人の豪傑ならぬを示さざるはなく、直垂の袖を搔合  
 して座したる後には、其臣蒲生右京、佃又右衛門、其他近侍の  
 武士兩三人控へたるさま、銀燭の光に輝き渡り、威儀堂々とし  
 て四邊を拂ひ、主なる家康と比べては、眠れる牛の前猛虎の  
 天を睨めるが如く、亭々たる松樹に隣りて、千年の大杉雲を衝  
 けるが如し。  
 寵愛の家來を殺されし憤りは自ら眼中に現れたる氏郷、主人の  
 笑しげなるには引替え、宛がら苦虫を喰ひたらむ人のこと、恐

ろしき面持して、ユラリ一膝進めて、  
 『御老體には氏郷が不意の推參、嘸奇怪にも覺されつらう、が、  
 餘儀なき事』  
 と先づ前置して、  
 『某が家來に西村佐助といふがおちやつて、其者肝もあり腕も  
 よく一かどの役にも立つ者でおちやつたが』  
 『なる程なア』  
 頷く家康、何んの事ぢや、態々の來意は家來の自慢か、其家來  
 を我に何うせうと云ふにやと、尙も其次を聞けば、  
 『古田織部正家來庄林理助といふ者に今日大佛に於て殺害され  
 ました』  
 『ほう其れは〜』  
 『處が御老體お聞き下され、その理助と申す者、卑怯未練にも  
 其場サ立退いて、折柄通り合された御許様御家來、久世三四



三〇  
 郎が行列へ飛込うで久世にかくまうて呉れと頼うだといふ事  
 でナ  
 家康の眉は次第に驛まり、御側に控へし阿部伊豫守は昵と耳を  
 澄しぬ、  
 「久世は事もなげに其れを引受けて、我らが方より、使者を以  
 て理助を渡しくるゝやう申し入るれど、一旦頼まれし武士の  
 意地サ貫かうためか、理助を居らぬと云張つて飽までかくま  
 ひゐる様子、蒲生氏郷ともあらう武士が、家來を殺され、其  
 まゝに泣寝入つたとあつては、御老體の家來久世にかくまは  
 れたる爲に、家來の仇も得とらざりしとあつては、會津百萬  
 石の瑕になり申すぢやで、今宵は御老體へお願ひに參つた、  
 即ち三四郎へ御鏡を下されて、理助を我ら方へ渡しまするや  
 う、御取計らひが願ひたい」  
 何んの事ぢや、奥州百二十萬石の主人が態々の入來、天下の大

事か、殿下の御身の上かと思へば、家來の遣り取り、理助が何  
 うぢやの、久世が何うぢやの、さては可笑しきこと、斯程の小  
 事に態々身を動かして立騒ぐやうでは、會津百二十萬石も追付  
 け人の者、思へば氣の毒なれど、弱肉強食は戰國の習ひこれな  
 れば此仁も左まで恐るゝに足らずと、家康は心の裡にて笑ひな  
 がら、開を夢にも顔には現はさず何事か非常の大事にても聞き  
 たるが如く、さらぬも多き額の皺を愈々寄せて、事六ヶ敷げに  
 ホツと息を吐きたり。  
 此時、阿部伊豫守は膝を進めて、  
 「恐れながら、飛驒様御前へ、主人に代つて某より申上げます  
 る」  
 此奴も徳川家來の中にて去る者と呼はるゝ智者、何事をいふ  
 やと、氏卿は眼を睜りぬ  
 「其儀ならば疾う承知罷りあつて、主人を始め一同お氣の毒に



思ひまいて、内々三四郎へ意見の加へまいたる事にて候、然るに、三四郎事、容姿よりも肝の太き者にて、度々武功もおちやりますれば、兎角我儘のみ申しまいて困り居ります、なれども、今宵は飛驒様御自身の御入り、格別の事におちやりますれば、如何様とも三四郎に申聞け、御心解け候やう急に取計らひませう』

と辨舌爽に述べ立つれば、家康も續いて、

『伊豫が申す通りでおちやる、他ならぬ御分と家康、云はれ兄弟のやうな、御無禮のやうぢやが、弟のやうな氣もする御分のこと、屹とお心の解けうやうに取計はせまするでナ』

云ひつゝ例の愛嬌ある、大福長者の隠居に似たる顔に、こぼるるばかりの笑持たせて、

『先づこれで要談は終つた、いざ是れから飛驒殿、一献参りながら例の黒白の勝負を願はう、はゝゝ』

斯う調子よく丸め込められては、流石の氏郷も煙に捲かれたる心地、何時までも苦虫走らせてもゐられず、始めて笑顔を見せて、

『御老體と我らは一目の違ひなれど、近頃は公務に驅られて久しう石も持ちませぬで、二目も弱うなつたらうか』

と是れより談話は軟らぎ出し、纏て御酒、御汲物など次第に運ばれ、東西の二英雄は一堂の中に笑ひ興じつ。

(其七) 只一死

『あゝ事むづかしう成つて来たわへ』

斯く呟きは此頃久世三四郎が方に身を置く庄林理助なり、晝とはいへど花散りて若葉色づく頃の習ひ小雨そぼふりて點滴の音さびしく母家とは庭を隔てたる離れ座敷の内に只一人黙然として座する渠は飽まで白き顔を皺め、紅の唇を固く結び、何處



をあてといふにもあらず、涼しき眼を睜りて瞬きもせず、折々  
ホツと太き溜息をもらすは何事。  
『たい身を殺して、恩人の難を救はでは、武士たる者の意地立  
たず』

渠は又斯く呟きて小首を捻りつ。

そも此男が日比の本調子にも似ず、斯くの如く思ひ惱める故  
甚麼といふに、蒲生氏郷が理助を求むるの心は益々切に、遂に  
所謂和尚直の勸化とやら態々徳川家へ出向きて家康に直談判  
に及びしより、家康も捨て置かれずと、即ち阿部伊豫守子息備  
中守を使者として三四郎が方に遣し、『理助事は其方一旦かくま  
いたる上は、最早や武士の意地も立ちたるなれば、此上は篤と  
思案して蒲生家へ相渡す方然るべし、よく』了簡致し見候へ』  
との上意に三四郎答へて『こは蒲生家の使者へも申候通り、今  
は某屋敷には居り申さず、此義は御請申上げかねます』とい

ふ、備中守是非なく有りのまゝを家康に復命したれば、家康も  
詮方なく、其旨氏郷の方へ申遣しぬ。

氏郷は例の癩癧、さらば是非に及ばず、此上は三四郎宅へ人数  
を遣し、果して理助が居るか居らぬか、家探しまても相尋ね候  
との事に、家康も其邊は御勝手次第、と取合す。

これを聞きたる久世三四郎、氏郷飽まで執念く此久世が屋敷を  
人数をもつて家探しせうとならば要こそあれと、少しも驚く風  
人情のなきのみか、親しき友に書を送りて加勢の人数を借受け、  
屋敷の大門一文字に開かせ、家の子郎等共には、氏郷の方より  
人数押寄するとも少しも恐るゝ體を見すべからずと戒め、手配  
充分に整へ今や遅しと敵の來るを待受けたり。

敵に斯程までの覺悟ありとは知らぬ氏郷方にては、物頭播磨田  
玄馬真先に人数を率ひ、勢烈しく久世が屋敷へ押寄せ、玄馬先  
づ玄關へ上り、主人氏郷の口上を述べければ、三四郎は袴も穿



かす、白衣の上へ大脇差を横たへ、『理介請取にとてわせられた  
 事承知しまいた、なれども能うお聞きやれ、たとひ何百何千人  
 の人数もて家がしせられうとも、居らぬものは居らぬなり、  
 理助鳥でもおちやらねば天へも昇るまい、土龍とやらでもおち  
 やらねば地の底へもくさりませぬ、萬一此方に居り申さぬ節は  
 久世三四郎武士でおちやる、家さがしの御返報には各位を其ま  
 りには歸し申さぬ、何時までも此小屋敷に差置き申さう、篤と  
 思案の定められて疾々家がしのせられい』と一圓請付けぬ顔  
 色もてハタと玄馬を睨み、今にも人数込入らば立ちどころに打  
 ちひしぐべき體にて、屋敷の裏には何方よりの加勢の人数にや  
 四五百人は群りゐる様子、鐵砲火繩の匂ひも強く、殺氣四邊に  
 充ちたるに玄馬を始め一同氣を吞まれ、然らば詮なしとて  
 何事もなく引取りぬ。  
 これより事件は愈々大きくなりて、翌日氏郷は五奉行へ願書を

出し、徳川家來久世三四郎には個様々々の意趣あれば當方へ被  
 下候へと願出で、此事早くも徳川家にて聞知り、同じく五奉行  
 へ願書を以て三四郎氏郷へ被下候は、家康直に御暇申し、氏  
 郷方へ命限りに推參候べしと届け出ぬ。  
 此事件を聞き給ひし太閤殿下の御驚き大方ならず、双方の意趣  
 より天下の大事ともなり、再び干戈を動かす如き騒動ありては  
 と、早速氏郷を召されて、其方家來を庄林理助とやらにむざむ  
 ざ殺されたる事、無念さこそあるべし、理助をかくまひたる久  
 世三四郎に申付けて本人を渡させ申すべし、去り乍ら、一通り  
 の喧嘩などは違ひて、自分意趣は更らになしと見えたり、理  
 助が主人織部も其方家來佐助に嘲弄せられたるにて、其れを無  
 念に思ひて佐助を殺害に及びしは所謂の臣たる者が君に盡すの  
 忠なれば、三四郎より直に其方へは渡すまじ、依て理助は一時  
 予が手許へ請取るべし、其上にて直ぐ其方へ渡すも好けれど、



切腹などにも及ばぬ詮なき事なれば、當分予に預け候へ」との御意に、氏郷は否まむ由もなく謹んで御請申して引下りぬ、殿下は又家康を招き給ひて「庄林理助は予が預りたれば左様心得らるべし尤も改めて予より其許へ預け度ければシカと預り候へ」との御捌きに、家康其まゝ御請して引取りけり。

倍臣の争ひより遂には殿下の御言葉まで出でしといふ風聞、其れから其れへ傳はり久世の耳へも入れば理助の耳にも入り、さりされど久世にも理助にも不利ならぬ殿下が斯る御捌きありしとは露知らず久世は今朝主君家康より急の召を受けて、必定我等がために不利なる事と思ひ定めて出仕し、理助は斯くも只一人思ひ惱めるなりき。

「當家の主人が今日の出仕、只事ではない様子、ハテ……」

理助は再び恚う吐きて拱きし腕を解もせず、斯うも事件むつかしうならうとは思はざりしに、西村佐助が餘りの暴言に此腹が

煮て、小身者の刀は大身の身體に立つか立たぬか試してくれんと、折を狼ふてゐたに恰も好し、大佛二の門の警固、飛んで火に入る火虫の佐助めがノコノコ來をつた、汝此時こそと思ふと其まゝ、武者震ひがして腕が鳴つて、其時は只モウ夢中で斬付けた、其折直ぐ腹を切ればよかつたに、高が蒲生家の物頭、此位の意趣で殺いて、其命の代りに自分の命を捨てる、些と馬鹿げてゐる、武士の一命は君に捧げしもの、兎角は君の御馬前、其れまでは何れへなりとも身を潜めて時の至るを、其場を立退いた處へ丁度久世殿が馬上で、折こそよけれど飛込で頼うだが事件の起因、斯うまで大袈裟にならうとは思ひもよらず、氏郷は百二十萬石の主人ほどでもなうて、穴勝にこの乃公を憎うで、渡せくと吐す、渡ひたら何とせう心得、家來の仇ぢやと吐いて、一寸試し、鋸引き、輕うて切腹はのがれぬ、要は只この乃公の命をとらうまで、此上は寧ろ立派に名乗り出て、氏



(華の道士武)

郷めの前へ引かれ、さあ斬るなら斬れ、突くなら突け、顔なり  
 首なり、背なり腹なり、腕、足、何處からなりと好な處から勝  
 手に料理せい、と身を投出して、奥州の豪傑と吐す奴を腹散々  
 罵つてくれうかされば折角此處まで骨折られた久世殿の心づく  
 しも水の泡、詰りは久世殿の顔をつぶす道理、其れもならずか。  
 久世殿が今日のお召は甚麼、再應の仰せをも背いて、飽まで理  
 助をかくまふ不埒者、長の勘當切腹、でもあるまい、閉門謹  
 愼、今直ぐ理助を蒲生家へ引渡せ、といふて容易にお請をする  
 久世殿ならず、何處までも武士道を立て通して乃公の身を保護  
 さるゝ、而うなれば久世殿は主に背く大罪人、其ればかりでは  
 ない、殿下の御聞きにまで達した一條なれば、殿下と徳川家、  
 徳川家と蒲生家、これや天下の一大事ぢや、元を洗へば這の庄  
 林理助、南無三寶、こりや斯うしては主君織部様にも飛沫はか  
 理、南無三寶、こりや斯うしては主君織部様にも飛沫はか

(華の道士武)

渠は例の一本調子にて斯く考へ及んでは、早や立つても居ても  
 むられず、此處の處を三方四方丸く治むるには只一死あるのみ  
 我一人腹搔切りなば跡には何の意趣も残らず、死すべき時は今  
 久世殿の御前より退出せざる中！  
 理助は素早く起上りぬ、軒端を拂ふ雨は蕭々として物靜かに、  
 勇士の最後には實に好き日なりけり。  
 理助はしづかに嗽き手洗ひ、悠々として元の座に戻り、徐ろに  
 双肌おし脱ぎさま容姿を正して小刀の鞘を拂ひ、左手もて臍の  
 邊りより下腹、左右とやわく撫で廻し、小刀押戴きて左の脇  
 坪、あはや突立んとする時、  
 「白痴ッ、待てッ！」  
 霹靂の聲は主人の久世なり。

(其八) 廣忠公の御召料



理助は勢込んで突立んとする矢先を挫かれ、はつと驚いて振向く前へ、ツカ／＼と進みし久世三四郎、何事の起りしにや、身には實よき鎧をヒシ／＼とよろうて、今出陣ともいへる見えにて突立つたり。  
この意外の状に理助はいよ／＼呆れ、己が右手には氷なす小刀を握れるをも忘れ、刻み膝に主を見詰めて甚麼をか云はんとするを、

「短氣ぞ庄林、其許が腹切られう仔細疾う釋めた、なれども、今は其れも無用、今日のお召は上々吉、其許のためにも、我らがためにも」

「やア」と理助は尙呆れし眼を睨りて、  
「御分の其さまは」

「さればちや、我らが此さまに就いては面白い話柄がある」  
三四郎は飽まで落着きて、理助が持てる小刀を見やりつゝ、彼

の白き長き顔に笑ひを含んで、片手を差伸べ开を指さしつゝ、  
「先づ其れからナ、危い、其刃物を」  
云はれて理助はハツと心づき、思はず赤面しながら、慌てゝ小刀を鞘に納め、衣紋を正して面目なげなり、

「お聞きやれ庄林、我らが此異装は他でもない、實は今日の出仕を危んでの狂言、其れは斯うぢや」

三四郎は鎧のまゝドツカと坐して得意の面持、理助は事の餘りに不可思議なるに思ひ惑ひて眼をパチクリ。

智者と呼ばれ、勇者と呼ばれ、氣輕者と呼ばるゝ久世三四郎、心に包むべからざる喜悅のありと見えて今朝屋敷を出でし時とは異りて、顔の光澤も牙々と咳一咳して、

「我ら其許をかくまうて以來、氏郷方から人数を差向けても事故なく追返し、僅か八百石の三四郎も百二十萬石の氏郷の軍に勝つた心地、今日まで少しのおくれも取らずに來たに、速



に主人よりのお召、何れ只ではあるまいと懸念して、先づ此通り鑑うて、馬上で出仕致した、處が、主君は我らのさまを御覽うせられて、さて、仰山なる出立ちかな、三四耶何が爲に物具して出仕せしぞと御尋ねぢや、其處で我らは斯う立ちながら』

と三四耶はスツクリ起上つて双腕を張り、

『さればでおちやる、この鑑は恐れ多くも先君廣忠公の御召料御秘藏の御物具に候、三州御陣の時私父へ下され、私へ傳へ候、何事にもあれ身の一大事の時に着候へとの御申付けなれば、今日の御召は私身に取つて一世一代の大事と心得まするで、斯く御前へ着用の致しました、御前にも其れにて御拜遊ばされませう、と斯く申上げた、固より日本一の御孝行でまします主君ぢやで、さらば暫らく待てと御意遊ばいて、御手水をめされ、家康只今父君に拜謁する心地にて候と仰せられ

庄林、主君には此三四耶の前サお手をつかせられて御拜遊ばいたッ』

語り来る三四耶の顔には得意の色のありくと、

『其處で、我らはカラくと笑ふて斯ういふた、私御前サ罷出まするとして宿元にて散々廣言しましたが、其廣言空しからず候、といふと、主君には訝しげな御顔で、如何なる廣言を致したとの御尋ねぢや、さればでおざります、我宿元の出まする時、家人は勿論、親類縁者に向ひまいて、今日の出仕は只事ではない、何れ庄林をかくまうた事でがなあらう、されば事件むづかしからうで、今日は主君に御叱りを蒙る前に先づ御前に手をつかせて見申さう、と斯う申して罷出ました、とお答へ申上げると、流石は我らの主君ぢや、少しも御怒りはなうて、心地よげにお笑ひ遊ばいて、さてこそ、鑑着用の理由明ぢや、憎い奴めと御機嫌は斜ならずぢや』



今朝は一世一代の大事を覺悟して出行きし人が、今は斯くも得意げに喜ばしげなる状の、餘りに表裏したるに理助は訝しさに絶えず、三四郎はいよゝゝ調子づきて、

「其れから今日お召の次第を承つたが、庄林、其許喜ばねばならぬぞ、其許の事は殿下の御聞に達し、徳川家と蒲生家の争ひともならば天下の一大事と、其許を氏郷へ渡さず、殿下が自らお預り遊ばさるゝ事となつた」

「ヤ、何んと云はるゝ、殿下が倍臣の某を」と理助は驚き膝を刻みぬ、渠は宛がら春の野を行く旅人が、思ひもよらず頭上に霹靂の音を聞きしが如く、呆れたる顔して主の得意顔を見まもるのみ。

「といふは表面、其實殿下より其許を我等主君へ改めてお預けなされたぢや」  
徳川御家へ」

と理助はますゝ呆れる、  
「いかにも、今日のお召しは即ち其事、其許を一刻も疾う出仕せしめよ、といふ仰せ付けられぢや、これにて我等も肩の荷を卸りたし、其許も幸福、この上の大慶はない、斯くても其許は切腹するか、はゝゝゝ」

三四郎は左も心地よげに天を仰いで高笑したり。  
成程これは切腹も出来ぬ、第一あるか無きかの倍臣の身が、一ち天四海に仰ぎ見ものなき殿下に其名を知らるゝさへ譽なるに其方様の御扱ひとあつて、海道一の名將と聞えし徳川殿に預けらるゝ、甚麼なんたる身の面目ぞ、これといふも全く久世殿が義侠より、この上は切腹どころか數ならねど大事のく、此命なり、萬づを徳川殿御扱ひに任して、聽ては蒲生殿に渡さるゝも怨みはなしと、理助は我知らず大粒の涙をこぼして、三四郎が前にヒタと兩手をつき、



「はッ身に餘りまいた殿下の御扱ひ、何條背き申さう、たい御分が差圖に従ひまいて」  
庭にはシトくと若葉をぬらす雨の音しめやかなり。

(其九) 主従の別れ

雨は何時しか歌みて、月は朦ろげに四邊を照しぬ。理助が主人の古田織部正は今朝より殿下の御前に召され、終日お茶のお相手申して、初夜過頃御暇を貰ひ、これより屋敷へ歸らんと、小身者の萬づに氣軽く、馬上しづかに伴人五六人を従へ、雨後の月色なにとも譬へがたなき夜の景色に見惚れつゝ、馬のあかきしづかに歩ます折しも、路傍の松の小蔭より現はれし黒き人影あり、人影は此方の氣付かぬ間にツカくと走り寄り、  
「主君しばらく、しばらく主君」  
呼止めながら行先に額づきぬ。

何者ぞと供人は何れも刀の柄に手をかけ、織部は馬の手綱を絞りて肥と月光に透しつゝ、  
「何者ぢや何者ぢや」  
と安き心もあらず、  
「小生めに候、庄林理助めにて、御懐かしう存じまする」  
といふを聞きて、織部は思はず馬上より首を伸べて、  
「む、庄林、理助といふか」  
振り仰ぎし白き理助の顔を、見下せし織部が顔とは月に照され、  
「おゝ如何にも理助ぢや、理助、近う寄れ理助、近うく」  
彼方の未だ近寄らざる間に、此方は馬のあがきを二三歩進めて久しく家出して歸らざる我子に測らずも途中出會ひし思ひ、供人は何れも理助の方を瞻りて言葉を出すに至らず。  
理助は主に逢ひし嬉しさに思はず立上り、馬の平首の所へ己が



顔の摺合はんばかりに、

「御機嫌の體を拜して、理助め恐悦を申上げます、今宵主君には此所を御下りと聞きまして、他ながら御暇の申上げませうと、小蔭に潜み居りましたなれど、月の光に御姿を見上げまして、餘りの御懐かしさに、驚かし申しまして御座りまする」

「他ながらの暇をひととは氣係りぢやぞ、聞けば汝は久世殿屋敷にかくまれ居るとやら、汝の風聞は専ら高いが、此後は奈何致す了簡ぢや、蒲生殿と徳川殿、殿下の御扱ひ、大概は聞及んだが……」

「さればで御座りまする」

と理助は先づ佐助を殺害せし當時の状久世にかくまはれしより氏郷が徳川殿への直談判、殿下の御扱ひ、今日久世が御前へ召されし事に至るまで残らず語りて、渠はハラ／＼と涙を滾し、

「で、明日は徳川殿へ参りまする、理助め不敏には候へど、君臣の義も篤く心得居りまする、なれば、二君に仕へまする心は更らく御座りませねど、殿下の御聲が、是非に及びませねば、明日徳川殿サ参りまするで、勢につく者とな思されませぬやう、たい此事が一言申上げたさに、また、暫らく拜しませぬ尊顔に接しましてと」

渠は飽までも一本調子なり、今戦國の世に、誰しも良き主に従ひ、大身の主人を持つて身の榮華を極めんと競ふ中に、渠のみは天にも地にも主といふは織部の他には望まざるなり、世上幾千の人に褒めらるゝよりも織部の一笑を譽とは思へるなり、されば自分が今徳川家へ預けられなば、自然徳川の臣下として思はぬ主に仕へては叶はず、斯くては織部の思はく甚麼やと、ただ是れのみが心にかゝり、今宵織部が御殿を下りくると知り、云は、其意志を疏通せんと、忍びて此所には待ちゐたるなり。



子を見ること親に如すと云はざるべからず、織部は僅かに室町家の古式を覚え、武道よりも茶道を以て太閤の寵をうる者、海道一の名將徳川家康とは並びもつかねど、渠も又これ戦國の武士、小祿なればとて、長袖なればとて、親しく家來を見るの明はあり、理助が心は日比の渠が素行に照して早くも釋み了り、さても可憐のもの、いちらしの者と、思はず眼を瞬たきて、

「解つた、能う解つた、汝の云ふ所、佐助を斬つたも、殿下が仰せられた通り、數ならぬ此の織部への忠節、過分に思ふ、たい怨むらくは小祿小身の家ぢやでナ、蒲生殿を箭表にして汝を構ふことが出来ぬ、織部心外に思ふ、なれども、幸ひ久世殿の義侠で今日まで事なかつたは何よりぢや、此上は徳川殿サ参り、家康殿を我らと思ふて忠義せい、聞及ぶ海道一の名將、殿下さへなくば、天下の主人とも成られう御方」

思はず口が迂りしに心付き、織部は慌て、四邊り見廻し、急に言葉轉じて、

「新しき主に仕へて古き主を思ふは不忠、自然と奉公も粗略になる、汝徳川殿サ参りなば、此事能う心得てナ、我らが事は思はずに精一杯の忠義を勵むが可いぞ、蒲生殿とて何時々々までも執念には思はれまい、應ては今日の事を水に流されう日もあらう、其時は再び我らが方へ戻らうなどは思はずに末代までも徳川殿サ仕へい、主従の縁あつたればこそ斯うも成つたぢや」

首をうなだれて聴く理助が眼よりはポロリと熱き露の滴りて、渠は道理に明るく、情け深き主の言葉の有難さに胸迫つて一語も發するを得ず。

「こは汝への餞別ぢや、長く予と思ふて帯びておくりやれ」

織部は己が帯したる脇差を抜取つて差出しぬ、



「はッ、こは思ひもよらぬ拜領、理助め身の守りとして」  
理助は打頼ふ双手を伸べて押戴き、見上ぐる顔、見下す顔、互  
ひに物をも云はず見交す理助が額へ、ポツリと落ちし一滴は、  
月の雫か、あらぬか。  
この情誼厚き主従が状に、織部が供人は何れも頭を垂れて涙を  
呑み、馬さへ其情に感じてや平首を垂れて打萎れぬ。

(其十) 武士道の華

理助は其翌日家康に目見えて、其まゝ旗本の中に加へられて奉  
公する事凡て半年程、この間理助は新しき主のさまを見て心に  
驚くこと大方ならず、僅か二萬石の古田織部に比べては、乞食  
の宿と分限長者の住居と程の違ひあり、外様普代の家來も夥し  
く、馬物具兵糧のたぐひも倉庫に充満し、日毎に御機嫌伺ひに  
とて出入る諸國大名ひきも切らず、門前常に人馬の群をなして

邸内不斷の春を見るがごとし、殿下の御殿の繁昌にも譲らぬ有  
様舌を捲かざらんと欲するも得べからず。  
されど是は尙外観の一部に過ぎざるのみ、深く内部のさまを窺  
へば愈々驚くべきものあり、主なる家康は其丸々肥太つたる顔  
に笑を浮かべ、山崩れ海翻へるとも其笑顔をかえず、其傍には、  
本多佐渡守として身の丈五尺に足らぬ、色の小黒き、眼の凹み  
る、額の高く廣く、眉と眼の間のせまりたる、鼻の平たき、唇  
の薄く堅く結ばれたる、一見峻しげなる底意地悪げなる、詐り  
の計策多げなる、人を殺すと虫を殺すほどにも思はざるやうな  
る、厭はしげなる人物の、寝るにも起るにも、食ふにも語る  
にも、常住不斷ついで、扇子を膝に、額を前に猫脊になつて  
ウトリくと坐睡り居り、この漢の膝の扇子若し一寸上らば天  
下に大事ありと人は皆云ひ敢へり、即ち家康の爲には帷幕の謀  
臣、漢高祖の張良に於ける、劉備の孔明に於ける其れよりも、



猶多く重んじ、家康は渠を其身の分體の如く取扱ひぬ。  
 其他普代の家來上下同じて、この君を神の如く尊み、親のごと  
 く親しみ、此君のためには一死以て恩に酬ゆるを今日か明日か  
 と待つものゝ如く、上下和樂し和氣天地に充ちて、世は血  
 腥き風なほ吹けど此處ばかりは天上界に遊びし心地せらる。  
 半年の間に斯く觀察せし理助は、一種云ふべからざる或る感に  
 打たれて、舊主を忘るゝにはあらねど、此君のためならば命も  
 惜しからじ、家も願ふに足らずと、飽まで疲れし人が、ツルリ  
 ツルリ睡眠に引込まるゝが如く、心ともなく知らずくの中に  
 身も心も捧げて仕へぬ。  
 家康は或日、蒲生氏郷を招きて饗應せんとて、先づ理助を側近  
 く呼出しぬ、其傍には相も異らず例の本多佐渡の居眠り居りつ。  
 今日氏は郷を饗應ある日、其れに主の我を召す。こは必らず例  
 の一條ならむ、好的々々、何事も只此君の云ふが儘に従ひ、氏

郷の方へ渡されなば立派に渡されむ、饗應の肴に腹切れとなら  
 ば切らむと理助は確と覺悟の臍を堅めて恐るゝ御前に進みぬ。  
 家康は例によりて福々したる笑顔、  
 『理助、何時も健固でよいの、近う寄れ』  
 『はッ』  
 『日々神妙の奉公満足ちやぞ』  
 『はッ、恐れ入ります』  
 『其處でナ、今日汝を召出したは他でない、汝も知ること、飛  
 彈殿を招待するちや、汝を執心の氏郷殿をナ』  
 『はッ』  
 『汝は飛彈殿御前サ出るは否か』  
 借こそ御參なれと、理助はハッと思なれど固より覺悟を極めし  
 身なれば、少しも惡びれず、  
 『恐れながら、御前の仰付けでお坐りますれば、飛彈様御前は



「ほを、神妙な覺悟、家康満足ちやぞ、さらば相談ちやが、今日、汝突然飛彈殿御前へ出て見ぬか、何とかいふてナ、飛彈殿もあれ程の御仁、家康に對しても正かに、汝を請受けて歸らうとも仰せられまい、何うちや」

「はッ萬づ御指圖に」

「む、好的々々、用は其れだけぢや、ようせい、抜かるな、最うよい立て〜」

御客饗應の準備は充分に繕ひぬ、聽て定刻ともなれば、今日の正客蒲生飛彈守は早やお入り、近從の武士五六を従へ、極て身輕に御出迎ひの阿部伊豫守、子息同苗備中守の二人に案内せられて、廣間を通り抜けんとせらるる時

「暫らく御待ち候へ」

聲と共に、傍なる狩野元信が繪きし大衝立の蔭より、摺膝に豐り出でしは庄林理助なり、渠は禮服の折目正しく、脇差を二三間後邊へ投捨て、額を疊に摺付けて、

「高貴の御方を呼止めまいて、恐れ入りまする、私事は御聞及ばせられれまする庄林理助に御坐りまする」

「豫守は、子息備中守と左右より、

「理助控へい」

「御無禮に相成つてはならぬ」

「恐れ入りまする、暫らく拜謁の榮を希ひまする、さて私事、御家來西村佐助へ私の遺恨は御坐りませねど、先生古田織部殿を小身者なりと彼是嘲けりまいたで、其鬱憤にて遂に佐助を討果しまいて、御前御憎しみを受けまいたる義にて御坐り



まする、御歴々様方の御介抱を受けまいて、斯く助命相成  
いた、是れにて何れも様御弓矢の義理は相立ちまいたかと存  
じまする、就きまいては、只今、庄林理助めを御手討になり  
とも、また明日にも御指圖次第御屋形へ罷り出まする私存念  
何様とも御心任せに」  
なほも頭を擡げず、思ひ入つたる渠が狀に、氏郷は徐に其場へ  
着座あつて、

『さて、感じ入つたる愛い奴、聞きしに優る人品骨格、氏郷  
其志しを聞いたで、最う日本神々に誓ふて意趣は残らず、  
此末は當御屋形へ何時々々までも奉仕候へ、汝ごとき者をこ  
そ武士とはいふなれ、やがてゆるく逢はうぞ』  
氏郷は其まゝ起上つて奥殿深く導かれぬ。

其日の御饗應も濟みて後、理助は家康氏郷主客の前へ態々呼出

され、氏郷より盃を賜りぬ。  
これを武士道の華として當時一同語り取りき(完)

説小武士道の華(終)



大正元年八月二十日印刷  
大正元年九月一日發行

小説家後編

著作  
所有

定價金四拾五錢

著作  
者

稲岡奴之助

發行  
者

青木恒三郎

印刷  
者

堀越幸

東京市日本橋區通二丁目十七番地

大阪市西區阿波座二番町一番地

發行所

大阪市東區博勞町心齋橋角  
振替口座大阪貳貳〇番

高山堂  
電話長南千五百番

發行所

東京市日本橋區通二丁目角  
振替口座東京貳貳八九番

高山堂  
電話長本局七八九番

此處為重複拍攝之內容，因光量不同導致文字模糊，難以辨識。



嵩山堂出版小説

全	全	全	全	全	全	全	全	浪六
金剛盤	夜叉男	大悪魔	仍如件	石田三成	當世女	うき舟	うき世車	煩悶病院
二册全	二册全	二册全	二册全	一册全	二册全	一册全	二册全	二册 浪六
當世五人男内	最後の黒田健次	當世五人男内	當世五人男	浪華名物男	うやむや日記	三人兄弟	毒婦	最後の岡崎俊平
上田力	黒田健次	黒田健次	當世五人男	浪華名物男	うやむや日記	三人兄弟	毒婦	岡崎俊平
三册全	二册全	三册全	二册全	三册全	一册全	二册全	三册全	二册 浪六
赤蜻蛉	原田甲斐	日本武士	やまご心	武士道	明治十年	當世五人男内	當世五人男内	當世五人男内
一册	三册	一册	一册	二册	一册	當世五人男内	當世五人男内	當世五人男内
						吉田雄藏	川上三吉	倉橋幸藏
						二册	三册	三册

大正元年八月二十日印刷  
大正元年九月一日發行

小説家後編  
著作權所有  
定價金四拾五錢

發行所

大坂市東區博労町心齋橋角  
振替口座大坂貳貳〇番  
高 山 堂  
電話 南千五百番

東京市日本橋區通一丁目角  
振替口座東京貳貳八九番  
高 山 堂  
電話 本局七八九番

著作者 稻岡奴之助  
發行者 青木恒三郎  
印刷者 堀越幸

東京市日本橋區通一丁目十七番地  
大坂市西區阿波座二番町一番地



嵩山堂出版小説

全	全	全	全	水陸	全	全	美妙	白笠原也
戀の浮島	野蠻人	美人船	霧姫	飛ぶ人	金忠輔	女装の探偵	漁隊の遠征	妹
一册全	一册全	一册全	二册全	一册水陸	一册水陸	二册全	一册全	一册水陸
海底の寶庫	錨	大暗礁	荒鷺の爪痕	漁師の娘	稻妻銀行	二人女王	廢船萬里號	海底の噴火
一册全	一册全	二册全	一册全	一册全	一册全	一册全	二册全	二册水陸
秘密世界	誰が罪	空中飛行器	水車物語	黒雲	荒浪草紙	相模灘	女海賊	花
一册	一册	二册	一册	一册	一册	一册	一册	一册

嵩山堂出版小説

全	全	全	全	全	全	全	全	浪六
古賀市	鬼あざみ	大阪城	十文字	花車	品定め	浮世双紙	武者氣質	蕩六之細道
一册全	一册全	一册全	二册露伴	一册全	一册全	一册全	一册全	一册浪六
五重の塔	勇魚捕	三保物語	新羽衣物語	後の海賊	海賊	呂宋助左衛門	魚屋助左衛門	草枕
一册全	二册白笠原也	一册眉山	一册全	一册全	一册全	一册全	一册全	二册露伴
見果てぬ夢	女教師	神出鬼没	真西遊記	もつれ糸	雲の袖	ひごり寐	菊の濱松	さゝ舟
一册	一册	二册	一册	一册	一册	一册	一册	一册



嵩山堂出版小説

全 罪 ご 罪 一册全	風業 戀 學 士 一册全	荷業 反 魂 記 一册全	萍水 山 霧 一册全	春葉 山 櫻 一册全	秋聲 地中之美人 一册全	天仙 善道邪道 一册全	岡本 紀 文 傳 二册全	田村 松魚 脚 本 家 一册
玉 の 輿 一册全	鬼 士 官 二册全	新 發 明 一册全	阿 鼻 焦 熱 一册全	自 殺 ご 自 殺 一册全	白 浪 女 二册全	女 華 族 二册全	唐 撫 子 二册全	寒 菊 二册
奇 美 人 一册	半 元 服 一册	化 粧 く ら へ 一册	忘 れ が た み 一册	奴 島 田 一册	横 戀 慕 一册	罪 の ゆ く へ 二册	卯 花 絨 一册	造 船 博 士 一册

嵩山堂出版小説

全 罪 の く や み 一册全	全 海 ご 陸 二册全	全 鬼 の 妻 二册全	助 奴 之 家 二册全	全 汽 車 の 大 賊 一册全	全 海 水 浴 一册全	全 海 國 男 兒 一册全	全 地 中 の 秘 密 一册全	水 蔭 秘 密 の 使 者 一册
憐 な る 澄 子 一册全	人 の 妻 二册全	三 人 書 生 一册全	志 二册全	小 英 雄 二册全	小説 乃 公 は 偉 い ぞ 一册全	姉 の 仇 一册全	由 井 が 濱 一册全	貴 公 子 二册
獅 子 王 一册	彌 生 物 語 一册	花 山 花 人 一册	女 の 一 心 二册	雌 龍 雄 龍 二册	化 物 屋 敷 一册	金 之 冠 一册	女 可 恐 二册	惡 魔 一册



書雜版出堂山嵩

冠太 者郎	津水	及己	斬渡 鬼邊	讀賣 新聞	諸大 家	國武 邊	藤原 顧山	鹿島 修正	美妙
喜劇玉手箱	新百物語	微笑	名流百話	明治名士の逸話茶話	涼簞	機外觀	評剪煙新話	西廂記	博多小女郎浪枕
一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊
百一 驚讀	がしに	全	全	全	子世 笑	道人 皮	二山 星形	孤中 島島	平木 白星
妖怪府	滑稽珍文	お笑ひ草	頓習百談	滑稽三題噺	滑稽落語集	滑稽玉手箱	嗚呼古遊君	子供芝居	舞伎桃太郎
一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊
謙安 吉藤	梁藤 城堂	思三 孝熊	小微 史笑	全	全	櫻所	蓬岬 子	百一 驚讀	百一 驚讀
偉人の尺牘	慷慨家詩文歌評釋	近世崎入傳	勤王家百傑傳	先哲百家傳	徳川時代の文學	明治百傑傳	南朝北朝	おもちゃ文庫	珍事奇談
一冊	一冊	二冊	一冊	二冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊

說小版出堂山嵩

全	全	全	全	全	全	子仰 天	全	風葉
源氏車	歌枕	からくり的	丸腰銀次	大喝采	樂屋銀杏	紅筆双紙	戀女房	戀無常
一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	二冊
鐵腸	全	全	微笑 小史	全	全	全	全	松葉
雪中梅	近世歴史 雪月花内 大和の花	近世歴史 雪月花内 筑波の月	近世歴史 雪月花内 櫻田の雪	玄雪姫	煙草盆	一夜畫工	金剛武者	無名城
一冊	一冊	一冊	二冊	二冊	一冊	一冊	一冊	二冊
子五 圓	書軒	吐芳	青萍	全	全	全	全	鐵腸
滑稽 小説 五圓紙幣	好男子	黒牡丹	谷間の姫百合	啞の旅行	戦後の日本	明治四十年の日本	南海の激浪	花間鶯
一冊	一冊	一冊	二冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊